〔書　評〕

James A. Sanders
TORAH AND CANON
Fortress Press, Philadelphia, 1972, pp. 146.

榊原康夫

拙著『旧約聖書の生い立ちと成立』について、本学会員中沢啓介氏の御高評をいただいたが、その中で同氏は、拙著が歴史主義に過信しすぎており、今や旧約正典の正典たるゆえんを神学的に検討する必要がある旨を指摘された。その必要は同書二三四頁で指摘したつもりであったが、欠けを補う意味で本書を紹介批評することにした。

本書は外形からいえばわずか一四六頁のペーパー・バックにすぎないし、その叙述も学問的難渋さを一かけらも見せず通俗解説書に似た読みやすさを備えている。しかし内容の豊富さは第一級であり、目標とするところはきわめて大きい。著者サンダースは、ニューヨーク・ユニオン神学校聖書学オーバーン教授で、万国聖書協会旧約本文批評委員、アメリカ東洋研究所死海写本委員、死海写本学国際チーム員などの要職にあり、一九七一年のコルゲート・ロチェスター神学大学のアイアー講座で講じたものが本書である。

著者は「緒論」において、従来最も無味乾燥であった旧約緒論総論が、古代写本の大量発見と、本文学・正典学それぞれの興味が一新されたこととによって、今日の神学教育で最も目まぐるしく変転し興味を駆り立てる学科になりつつあると指摘する。本文学は釈義と、正典学は聖書神学と組み合わせる方がよい、と言う。二〇世紀旧約学は、低等（本文）批評と高等（歴史）批評とに分かれ、前者は比較言語学と様式批評へと移った。様式批評から編集批評、伝承批評、比較ミドラーシュ学へと学問的興味は進みつつある。このような動きを略記してから、著者は正典批評学を提唱するわけで、本書はそれをユダヤ教とキリスト教の双方に呼びかけ、特に旧約正典の第一区分「トーラー」と第二区分「預言者」に適用して展開してみせる。目次を紹介すると、全体の構成がよくわかるだろう——

緒論・正典批評学への招き（二〇頁）
一　トーラーと歴史（五三頁）
　A　トーラーの形態（三〇頁）1　物語、2　範囲、3　詠唱、4　モーセとダビデ、5　北と南
　B　諸律法と編集者たち（二三頁）1　諸律法と「律法」、2　申命記、3　祭司たちと編集者たち、4　エズラと「律法」
二　預言と文書（六二頁）
　A　預言者たちと国家（三六頁）1　預言と預言者たち、2　恍惚と霊、3　苦悩とみことば、4　審判と改革
　B　文書と正典（二五頁）1　身元確認と正典、2　知恵、3　ヨブ記、4　歴代志、5　諸文書
結論（四頁）と索引

これからわかるように、第三区分「聖文書」についても解説はあるが（二B）、大半は第一区分と第二区分に集中しているので、この書評もその点にだけ限定したい。

著者は正典批評を具体的に言えば、初期伝承では決して出エジプト伝承から切り離されていなかったカナン征服伝承が、最終形態の正典ではトーラーから切り離されて第二区分へ移されたのはなぜか、いつか、という問いに答えるものだと説明する（一七頁）。こうして正典批評は、いわゆる偽預言者から出た本をわれわれが受け継いでいないか、それをどうして知り得るか、を問うのであると解説する（一八頁）。

まず「トーラー」なる語は本来「律法、法典」よりも「教訓、啓示」を表わし、事実としてもイスラエルの族長から捕囚までの一大歴史篇の初めをなしている。トーラーの権威はトーラー物語の権威である。聖書正典は、第一神殿の灰（前五八六年滅亡）からと（旧約正典第一区分と第二区分）、第二神殿の灰（後七〇年滅亡）から（旧約正典第三区分と新約）成り立っている（一A1）。

旧約伝承批評学は、カナン征服までを語る詠唱（サム上一二8、申二六5—9、ヨシ二四、詩一〇五、一〇六、一三五、一三六）と（一A3）、ダビデ・エルサレム伝承まで語る詠唱（サム下七8—16、出一五、詩二、一八、二〇、二一、四五、七二、七八、八九、一一〇、一三二）があることを明らかにした（一A4）。前者は結局「六書」のミニアチュアであり、この二種の伝承のアマルガムが創世記から列王記までの一大歴史篇（JE）である。大事なことは、どちらでも「五書」より長く続いてカナン取得伝承までを含んでいることであって、現「五書」が人為的変形であることは、ヨシ二四25—27が法典導入文でありながらその法は続いて出てこない（出二〇22以下に編入？）事実や、「先の預言者」に王の勅令や法律が皆無な事（モーセ派が濾化したかモーセの仮面の下に五書に編入？）などから知られる。問題は、いつから現「五書」への短縮、全法律のトーラー時代への読みこみにシケムやエルサレムでなくてシナイだけがイスラエル法に必須の神的権威を有するという独占が起こったか、である。

アッスリヤ捕囚により北王国民の良い分子が南下したがユダに導入された。南王国ではセナケリブ包囲軍の奇跡的敗退（前七〇一年）によりエルサレム中心に伝承の吸収合体が始められた（一A5）。申命記は、ギルガルかシケムの祭儀から出た北の起源と、中央聖所（ダビデ・エルサレムの視点）との賢者によるアマルガムであり、カナン定住のイスラエルが得た一切の権威をカナン征服前に置くモーセ神学の再興の意義があった（一

B2)。Pの関心は律法と年代記との二種であり、捕囚のユダヤ教の身元確認のためにDを超克すること(六書編集)、ヤハウェ宗教全体像をこの視点で再評価すること(歴代・エズラ・ネヘミヤ刊行)を任務とした。こうして、連続的にダビデの星の希望まで語り続けてきたJEは、Pによって「五書」と「先の預言者」とに二分された(一B3)。エズラの持ちこんだ「律法」は、前六世紀初頭のPによる六書に対し、ヨシュア記を含めないと決めたバビロンのP(六世紀末)による「五書」であった。こうして、再建エルサレムはカナン征服予型の成就ではないとされ、ユダヤ教は身元がカナン(ヨシュア)でもエルサレム(ダビデ)でもなく、自分たちの一度も所有したことのない(従って決して失われない!)シナイにあることを確認した(一B4)。

預言者はかつてはヤハウェ宗教の創始者と考えられたが、今日ではむしろ族長期(準備)、モーセ期(創造)、ヨシュア―サムエル期(適応)、預言者期(伝統)、前七―五世紀(改革)の五時代に分けられつつある(二A1)。預言者文書は契約訴訟の七カテゴリーから成るが、その後半(論告、判決、変革、回復)において、偽預言者(官僚預言者)が古いトーラー伝承に立つ正統的摂理観をもちつつも、解釈において連続性の解釈を施したのに対して、正典預言者は実存的解釈をとった点で違っていた。しかしこの預言者解釈があればこそ、国家破滅が前六世紀に起こった時、トーラー思考をわがものとする新しきイスラエル(エレ三一31―34、エゼ三六26―27)がいたのである(二A4)。……

様式批評と伝承批評を縦横に駆使するこのような筆太の描写を、正確に紹介することは、評者の力に余る。ましてそれを反論することは、残された紙数では不可能である。手短な論評を附言すれば――

まず第一に不審な点は、カナン征服を必ず含む長短二種の古代詠唱、という前提にある。モーセまでしか語らぬ伝承は旧約に散在しており(詩七七、八一、九五、一三五)、著者がカナン征服までの詠唱の例とする詩一〇六などは明らかに捕囚まで語る。語り手はその目的によりどこまで語るかを自由に決めているのであって、そこまでがカノンであったわけではない。

第二に、カナン定住後、特に王国建国後の勅令法律がないのは五書に読みこまれたからだとする立論も、正しくない。評者はそれが行なわれたのは王国建立までであったと考えている。歴史書は、正典に記録されていない法を発布した事実は正直に記録するが(サム上一〇25、列王上一五19、二〇34など)、その内訳が記録に留められていないのは、宗教経典たる聖書にとって不必要だからである。

第三に、著者がみずから提唱する正典批評の任務を、いつ、なぜ「五書」がカナン征服を切り離したかと表現したわりには、著者の論述はこの肝心の疑問を有効に解けていない。その

論は結局、母国を失った離散ユダヤ教にとって身元確認をカナン取得前の旅するイスラエル(モーセ期)に見出すことが必要であった、という常識論に帰着している。これでは、なぜ第二区分まで正典化されたかを説明できないし、また「モーセ期こそ真の創造期、預言者は伝統的」とする説明とも矛盾する。

最も致命的なのは、正典性をイスラエルの身元確認という角度からのみ考察しようとする方法が、外典もミシュナーやタルムードも同系列に置かざるを得なくしているという神学的誤りである。著者はそれを意識的に行なっているのであって、正典の範囲問題は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の対話の必要上当面は括弧に包んでおくべきだと言う(結論一一七頁)。このような正典批評は、キリスト教神学教育の一環ではないし、それが今日最も興味をそそる学科になっているとすれば、それはノン・クリスチャンのセンセーショナリズムにほかならない。キリスト教的な旧約正典学の困難さを、つくづくと思わせられる。

(日本基督改革派東京恩寵教会牧師)

G. Herbert Livingston
THE PENTATEUCH IN ITS CULTURAL ENVIRONMENT
Grand Rapids : Baker Book House, 1974, 296 pp. xiv.

服部嘉明

本書は、一般に興味がないと言われやすい旧約聖書総論の中心とも考えられるモーセ五書をめぐる問題を、極めて興味深く、しかも信仰者にとって有意義に読めるようにとの配慮のもと、牧師、神学生は勿論のこと、一般信徒に広く親しまれ、読まれるように著述されている。内容も、その取扱い方も、近代の旧約聖書学の成果と傾向を充分考慮に入れながら、建徳的である。これは、著者の長年にわたる神学校での教職者養成の経験と、彼の旧約聖書観(p. xiii)によるものと考えられる。

著者は、グリーンビル大学(B.A.)卒業後、神学校教育をアズベリー神学校で受け(B.D.)、旧約聖書学専攻でドルウー神学校大学院からPh. D. の学位を受けている。現在は、母校アズベリー神学校で旧約学教授として活躍するとともに、機会を得るごとに聖地を訪れ考古学的資料の発掘に従事しており、Dr. G. Douglas Young とともに一九五九年には、エレサレムのアメリカ聖地研究所(American Institute of Holy Land Studies)

の設立に貢献している。また、著者は北米自由メソヂスト教会の按手礼を受けている教職であり、この書評の筆者の恩師の一人である。

内容は、よく整理された目次が示すように三部から成っている。第一部ではモーセ五書の背景を古代近東における年代の設定をめぐって考古学的資料を重要視してその説明をなし、更にそれら年代に該当する民族又は部族と彼らが歴史的に演じた役割に言及し、最後の部分では、旧約語学と伝承学の説明を考古学と言語学の近代における成果を評価しながら、古代近東の言語と古代近東の文字に関して、それらの性格及び記述法を、極めて一般的に、興味深く述べている。第二部では、古代近東諸国の宗教文学の性格について述べ、神話的要素又は、宗教概念の表現（表示）法について説明し、最後に、それらをモーセ五書における内容又は、表現と比較し、聖書記述の信憑性を文化的背景とその感化の現実性を無視することなしに強く論出している。最後の第三部では、モーセ五書論の中心とも考えられて来た文書説をめぐる批評的諸仮説の発展段階を歴史的に述べ、その背後にある聖書観、啓示観について神学的或は哲学的説明を要領よくなしている。著者はこの第三部で特に、モーセ五書の「モーセ著作説」という表現又は、概念がどのような意味において積極的に主張されなければならないかを論出しようとしている。最後に、正典論の問題を、モーセ五書の有機的な成立過程という観点から取りあげ、モーセ五書の成立が、旧約聖書全体の正典論において原理的に基礎となっていることを主張して本書を終っている。

本書の内容全体が教科書的要素と性格を保っているので、専門的で批評的な事柄は意識的に避けられているようであるが、それらを無視することなく、必要な場合には積極的に、最近の傾向を表示しながら論じている。考古学の年代決定をめぐって、C^{14}（炭素含有量測定方式）よりも陶器断片測定法の方が、パレスチナに関する限りでは殆ど決定的に優位であるとする点などはその一例である（pp. 8, 10-11）。著者は、（考古学に対する自分の最近における個人的な興味関心の反映であろうが）考古学については極めて詳しく述べているが、気になるのは、恰かも考古学（聖書）それ自体が聖書記述の真実性又は、信憑性を実証するためのものであるかのような誤った錯覚を読者に与えないだろうか、ということである。聖書考古学の性格づけが今少し客観的に明示される必要がある。また、古代ヘブル思想、或は概念の表現が西洋的でないことの説明に当っては、今少し詳しく、ヘブル的表現或は概念が、ギリシヤ的表現或は概念と対照的に相違することを説明する必要があるのではなかろうか（p. 61）。文字の記述法の言語学との関係で、モーセ五書の内容の伝承が論じられる場合にも、そのゆきとどいた一般的な説明は高く評価されるべきであるが、その反面、常に旧約の伝承という点で問題とされる口伝の性格とその問題に言及されていないのは非常に残念である（pp. 65ff.）。このことは、啓示、霊感との関連において信憑性、権威、無謬性が論じられる場合にも言い得ることである（pp. 262ff.）。その反面、創世記一―一一章を「歴史」として積極的に取り入れ、「歴史」又は、「歴史的」という表現の理解を説明している部分は高く評価されるとともに、是非一読を奨めたい。

各章の終りに、更に深く学び研究しようとする読者のために、代表的な文献表が提示されているのも教科書としては、巻末の二種（著者名と主題目名及び、聖句引用箇所）の索引とともにも有益であり、親切である。（各章末の参考文献表が全て英語圏のものに限定されているのは教科書「アメリカにおける」として意識的になされた結果であると考えられる）。もし本書に使用されている豊富な写真や説明図表などがそのまま転載使用出来るのであれば、是非本書が邦訳され、日本の保守福音派の諸教会で用いられれば幸いである。

（大阪基督教短期大学・神学院教授）

John J. Davis
MOSES AND THE GODS OF EGYPT : STUDIES IN THE BOOK OF EXODUS

Grand Rapids : Baker Book House, 1971.

西　満

創世記に関する注解書は英書、和書共かなりの量が出版されているのに比較して、出エジプト記の注解書は驚くほど少ない。これは出エジプト記に関連のあるモノグラフ（専攻論文）が多くの学者によって記され、その量は膨大なものであることを考えると、意外な感じさえ与えられる。しかし最近になっていくつかの出エジプト記に関する注解書が相次いで出版された。これは出エジプト記の重要性が最近とみに見直されてきたことによるのかも知れない。例えば、Martin North, *Exodus*, 1962 ; U. Cassuto, *A Commentary on the Book of Exodus*, 1967 ; J. P. Hyatt, *Commentary on Exodus*, 1971 ; A. Cole, *Exodus*, 1973. 等々である。これらの最近の出エジプト記の注解書の中で、本書はいくつかの面で異色をはなっている。しかし、まず著者について紹介してみよう。

著者ジョン・J・デイヴィスはトリニティ大学で学び（B・A）、さらにグレイス神学校で神学士、神学修士を獲得し、そ

の後エルサレムにあるニアイーストスクール・オブ・アーケオロジー（近東考古学研究所）で研究を重ね、本書が出版された時点ではグレイス神学校の助教授の地位にいる。

本書は全体で三三一頁、注解書としてはそれ程大冊といえるようなものではない。また一節、一節を区切って注解するようなことはあまりしていない。勿論重要な章句については、かなりのスペースを費やして論じており、ある点については他の注解書よりも、もっと詳細に論じられている。本書の目的は著者が序の中で述べているように、出エジプト記の本文を、最近の考古学的発見や、歴史学の発達が投じた光をあてても一度見直してみようというものである。特に最初の十二章では、エジプトの宗教や政治的慣習等との比較が詳説されており、出エジプト記の研究者に新しい光を与えてくれる。

注解者としての著者の立場は、かなり保守的な立場を保持している。例えば出エジプトの年代、出エジプトに参加したイスラエル人の人数の問題では、保守的立場に立ち、年代では早期説、また人数の問題では文字通り「エレフ」を「千」と解釈し、男だけで六十万いたと解釈する。しかし同時に新しい学説や考古学的諸発見、言語学的問題についてもこれらをよく紹介し大胆に議論を展開している。例えば、著者が緒論の中で相当の頁数を使って論じている「出エジプトの年代」の問題について考えてみよう。著者はまずこの問題に関する概観を簡単に述べた後に、後期説が論拠とする主要点を五つに分類して紹介する。それらは、(1)は出エ一11に、「ラメセス」という都市の名が出てくる問題、(2)は、ネルソン・グルックが一九三〇—四〇年にかけてトランス・ヨルダン地方の地表調査をした結果によるもの、(3)はパレスチナにおける諸都市、アイ、ラキシュ、デビル、ハツォル等が考古学の発掘によって前一二〇〇年頃破壊されている証拠があるという問題、(4)はアマルナ文書の中に「ハビルー」という名が出てくるが、それとヘブル人との関連の問題である。(5)はトウトメス三世（早期説をとる場合にイスラエルを苦しめた王）が、デルタ地域において大建築事業を遂行したという記録がない、という消極的な面である。こういった五つの主要点に対して著者はそれぞれの項目の中で、積極的に反論を試みる。第一に後期説をとった場合ラメセスという名の問題は解決するように見えるが、同時に次のような問題を提起する。イスラエル人がピトムとラメセスを建てるために重労働をさせられたのは、文脈からいってモーセの誕生前後である。出エジプトの際のモーセの年令は八〇歳であったから（七7）、第一章に記されている強制労働はそれよりも約八〇年前ということになり、もし一二九〇年説をとるならば、強制労働を課した王は一三七〇年頃となり、それはラメセス二世ではあり得ない。またラメセスの問題は一11にとどまらず創四七11にもでてくる。第二にネルソン・グルックの調査結果については最近いくつかの異なった説が出されるようになった。例えば、H・フランケン等はグルックの調査の方法、土器の解釈方法に

問題点があるとしている。第三にパレスチナにおける諸都市の問題は、聖書によればヨシュアの軍隊が町を攻撃し、徹底的に破壊し焼いたのはエリコとハツォルだけであって、他の町は軍隊を攻撃し住民を殺害しはしたが、町を破壊しなかった（ヨシ一〇章）。一例を挙げるとデビルはヨシュアによって攻撃されたが、後にカレブも攻略している（士一10—15）。だから前十三世紀に、デビル、ラキシュなどの町々が破壊されたという考古学的証拠は、ヨシュア記の記事と対応するのではなく、もっと後代のエジプトの攻撃によるものと思われる。第四のハビルーをヘブルと同一視することが困難な問題について著者はフィネガンの説をまず引用する。「アブディ・ヒバの必死の書簡はエルサレムがまさに陥落の危機に瀕していると記しているが、イスラエル人はダビデの時までエルサレムを占領していないのであるからアマルナ書簡のハビルをヘブル人と同一視することは適切でない」。これに対して著者は確かにエルサレムはダビデの時代まで占領はされなかったが、しかしヨシュアがその周囲の町々を攻撃したのは事実であるし、また、士師一8によると一度はユダの部族によって攻略されているという。第五にトウトメス三世の問題については、第十八王朝はエジプトを南北に二分して、それぞれ大臣をおき、エジプト北部に建築物を多く建てたことは考古学的に知られているという。特に第十八王朝がパレスチナ遠征を活発に行ったから、戦略上デルタ地域に多くの兵舎や倉庫を建設したことは考えられるという。

続いて著者は初期説（第十五世紀）の論拠を開陳する。その論拠の第一はI列六1に記されている四八〇年という年代である。同じ保守的立場にあるR・K・ハリソンがこの数字は一世代を四〇年として、十二世代を表わす概数ではないかというのに対して、著者はアーチャーの説を引用し、一世代の長さはむしろ二五年間ではなかったかとする。その他士師時代の長さの問題、エリコ発掘の結果、またメルエンプタハの碑等の問題をとりあげる。こういった問題はすでに多く論じられてきた事実であり、それ自体目新しさはないが、しかし保守派の中でさえ後期説に傾いている学者が多く出てきている現在、著者の論説には十分耳を傾ける価値がある。特に同じ考古学の資料も、その解釈の仕方によってはどちらの説にも用いることができるのだという印象が与えられる。換言すれば、それだけに出エジプトの年代決定は、困難でやっかいな問題を抱えているのかも知れない。ちなみにJ・フィネガンは一九四九年版では、この問題についてオールブライトの説を全面的に支持しながら一九五九年の改版では意見を全面的に修正し、後期説をとりながらも具体的日付を提示することをさけている。

著者が序でも述べているように十二章までの注解の中で、エジプトの神々に関する説明は特に詳しくなされている。そして「十災」がエジプト人の宗教に及ぼした影響について詳説されている。その点は本書の他書にないユニーク性があるのかもしれない。ただエジプトの宗教は多くの民間宗教の寄せ集めであ

り、それが時代と共に統合発展したものであるために、ただでさえ分りにくい性格を持っている。そういったことに対する概説なしに注釈をしている為に、その予備知識のない読者には、かなりの混乱を与えるのではないかという危惧を与える（これが解説者の一方的な危惧であれば幸いである）。

出エジプトに参加した人数の問題について著者はいくつかの説を紹介する。しかしそのような説を紹介した後にデイヴィスは、もしその人数を多くの学者がするように、思いきって少なくしてしまった場合、ヨシュア記や士師記の記事とバランスがとれなくなってくるという（↓ヨシ八章、士二〇15）。またこのように数を自分の意志によって合理的な数に変えることができるとすると、他の個所も変えることができることになり、聖書解釈の立場から面白くない結果がでるだろうという。しかしもしここで解説者の意見を述べることを許して貰えるならば、男だけで六十万、全部で二〇〇—二五〇万の群集はいかにも多過ぎる感じを拭い切ることはできない。たしかに本文の解釈は民数記の場合も含めて、いくつかの難解な問題に直面する。しかし、一九七三年のイスラエルのユダヤ人の人口が二七〇万であり、テル・アビヴ及びその周辺の人口が九〇万であることを思うと、この人数のままパレスチナに入国したイスラエルの民は、パレスチナにおいて、テル・アビヴなみの都市をたちまちつくったであろうということになる。たしかに、ハニイカットやメンデンホールのような説は受け入れ難いにしても、保守派の学者も「エレフ」というヘブル語の言葉の解釈にもっと真剣に立ち向かってみる必要があるように思われる。

とまれ、いくつかの問題点は残るにしても本書は福音主義の立場から記された出エジプト記の注解書として異色のものであり、野心作であると言える。特に一般の注解書と異なり、フットノートがふんだんに使われ、出典が明らかにされていることは、研究者にとって非常にありがたい。また、問題となる章句の解釈にあたっては、独断的に一つの説が記されているのではなく、いくつかの説が紹介されていることも研究者の手引きとして貴重なものである。巻末にある膨大な参考文献表も、研究者に多くのチャレンヂと助けを与えるものである。今後もこのような注解書が旧約の分野で多く出ることを心より期待したい。

（東京キリスト教短大助教授）
（和泉福音教会牧師）
（神学会　書記）

H.C. Leupold
EXPOSITION OF ISAIAH II

Baker Book House Company, 1971,
pp. 1-379. $ 7.95.

鍋谷堯爾

本書は、ロイポルドの旧約註解シリーズの一巻である。現在まで、ロイポルドは、創世記第一巻（一—一九章）、第二巻（二〇—五〇章）、詩篇、伝道の書、ダニエル書、ゼカリヤ書、イザヤ書第一巻（一—三九章）と、本書を出版している。イザヤ書の第一巻は一九六八年で、三年ぶりの第二巻である。本旧約シリーズは、牧師、聖書教師、聖書研究会用であるが、一般向きの註解書と考えてよい。それゆえ、紹介には、著者性、目的、批評学の説明がしてあると書いてあるが、専門的な資料を得ようとして、この註解書に期待するものは失望する。

著　者

ロイポルドは、Herbert Carl Leupold がフル・ネームである。ニューヨーク州バッファロー市のマルティン・ルーセラン神学校卒業後（一九二二年）、シカゴのルーテル神学校卒業によりBD号を受けた（一九二六年）。一九二二年—二九年、母校のマルティン・ルーセラン神学校の歴史神学の助教授を勤めた後、オハイオ州コロンブス市のキャピタル大学の福音ルーテル神学校の旧約教授として、現在まで（一九七一年）四〇年間、教鞭をとりつづけた。その間に、一九三五年、キャピタル大学から名誉博士号を受けている。キャピタル大学は、欧米式に、神学校を母体にして一八五〇年創立せられた綜合大学で、今日も、ALC（アメリカ・ルーテル教会）によって運営されている。神学校の方は、すでに一八三〇年に創立せられ、今日迄、一貫して、ALCの牧師養成にあたってきているが（卒業生三千人）、現在学生数二五〇、教授数一二、神学的特徴は、孤立主義でも超保守主義でもない保守主義とせられる。有名な教授として、新約註解のレンスキーが教えた。この神学校は、早くから、インターン制、病院実習制度をカリキュラムにいれ、結婚した神学生のためのアパートを準備したので有名である。

ロイポルド自身、BD以上の学位をとっていないし、教会史や、礼拝学にも教鞭をとっているし、この福音ルーテル神学校の雰囲気や立場を考えると、この註解は、長い講義生活の中から、じっさい的なニードに答えるために書かれたということが、当然、推測せられるのである。

イザヤ書の統一性にたいする立場

ロイポルドは、四〇章—六六章も、アモツの子イザヤによって書かれたという統一性の立場をとる。「序」を見てみると、

著者性の問題は第一巻に十分に論じられたとする。しかし、第一巻の「序」を開いて見ると、著者性については全く論じられていない。二〇―二一ページに、いくつかの段落の表題について述べた後、突然、「これらの引用した証拠により、イザヤが全体（訳註、一―三九章のこと）の著者であるという結論に十分であるということができる」と言いきっている。そして、著者性の問題がいかに複雑かについて、アイスフェルトを見るようにすすめる。ロイポルドの立場は、同じ二一ページの新約の証言に立っているようであるが、どれほど、しっかり立っているのか、判断するのに苦しむようなあいまいさに満ちている。たとえば、「まえがき」のところに、「多くの真面目なクリスチャンとともに、聖書学の領域で長く保持せられてきた、アモツの子イザヤが全書を書いたという理論を今も受け入れる」といいながら、つづいて「本註解は、著者の統一性を保持したり、弁証しようとすることを最終目標としない。不思議なことであるが、複数の著者性であろうと、単一の著者性であろうと、本書のメッセージは結局同じである」と言っているのである。

このあいまいさは、四四章二八と四五章一に、じっさいのクロスの名前がでてくるところの註解の仕方にあらわれる。一一二ページに、アモツの子イザヤが一五〇年前にクロスの登場について預言したといいながら、その問題の詳細については、それぞれの分析でふれると逃げている。じっさいの四四章二八と四五章一（一一六―一一九ページ）を見てみると、「クロス」そのものについては何の解説もしていない。

構成と展開

ロイポルドは、「序」において、四〇―六六章を三つに分けている。それは、四〇―四八章（主の民の救のはかりごと）、四九―五七章（そのわざを遂行するための主の代行者）、五八―六六章（主の救の達成）である（七ページ）。ところが不思議なことに、目次は、四〇―五五章をイザヤの第二部、五六―六六章をイザヤの第三部と分けている。前の分けかたは、「のろい」のことばの結尾で分ける方法であるが、なぜ、それが、「序」の中でだけ、ふれているのか判らない。目次は、第一部（四〇―五五章）を一五の小区分に、第二部（五六―六六章）を九の小区分に分けているが、なるべく章ごとにし、批評家のように、挿入とか、脱落のような工夫は避け、小区分をさらに、五つから八つぐらいに細分して適当な題をつけている。それぞれの題は、おんとうであって、その部分、部分をテキストにして、説教題にすれば、そのまま用いることができるものが多いから、このあたりが、ロイポルドの註解書が好評な理由であろう。彼の使用している方法は、ウエスタマンの文学類型によるとする（第一巻三六ページ）が、じっさいには、それが徹底化されず、挿入、脱落、順序変更もなく、じっさい的に、それぞれの部分が、説教のてっとり早い材料になり、おんとうな聖書研究のテーマを提供してくれるところに、本書の長所と限界がある。

それぞれの小区分の最後に、註の項があって、釈義の問題点が簡単にとりあげられている。たとえば、受難のしもべの章など、形容詞を巧みに使った主題をつくっている。

M、あがないのわざに成功する受難のしもべ（五二・一三―五三・一二）

一、深くいやしめられた後、大いに高められる（五二・一三―一五）

二、見せかけのみすぼらしさのために、全く誤解された（五三・一―三）

三、罪人たちのための自発的な身代り（四―六）

四、絶対的無実、絶対的服従（七―九）

五、その生涯のわざにおけるおどろくべき成功（一〇―一二）

資　料

四〇章のはじめに、デリッチと、G・A・スミスが引用せられているが、ウエスタマン、グンケル、ノース、マイレンベルグ、ライト、ヴォルツ、スキナーなどの名が五五章までに、それ以後ではフィッシャー、ウエスタマン、マッケンジーの名が見られる。これらの名が、ほとんど傍証者として用いられ、批判されることがないという点で、ロイポルドの註解の性格が判るというものである。残念なことに、参考図書目録もインデックスもない。第一巻には、簡単な図書目録があるが、その中には、カルビン、アレキサンダー、ヤングが抜けている。

結　論

以上から見ると、本書が、イザヤ書研究には、全く物足りない書物であることが判るが、それにもかかわらず、本註解がよく売れ、また、じっさい的にも、霊的な祝福を読者に与えていることを知る時、日本の教職たちも、貧しいなりに聖書註解のペンをとる勇気が与えられ、また、それが、高度の専門書よりも貢献することがあるという希望が与えられる。

（神戸ルーテル神学校教授）

Leon Morris
APOCALYPTIC
Wm. B. Eerdmans, 1972.

藤井　力

黙示文学は、その断片と影響とを旧・新約聖書の中に見出すことができ、聖書の背景を充分に理解し、イエスのみ言葉の意義をできるだけ確かに把握するために、重要な役割を持っていることは認められている。しかし一般的に、前二世紀から後一世紀にかけて著わされた特殊な性質をもつ黙示文学についての

理解が、きわめて乏しいことも認めなければならない。このような事を踏まえて書かれたリオン・モリスの本書は「黙示文学の緒論」として好著である。

著者L・モリスは既にこの書評欄（創刊号）で紹介されているように、ケンブリッジでPhDを受けられ、現在メルボルンのリドリー・カレッジの学長をされており、最近出版された「ヨハネ福音書注解」を初めとする二〇冊におよぶ書物において、その学識の豊かさと保守的福音主義者としての立場を明らかにしている。

モリスはこの小著（本文九二ページ）において、黙示文学の特質を紹介し、それらが生じた世界、環境、聖書との関係を詳約し、キリスト教神学と黙示思想とのレレヴァンスについて多角的に考察し、初期キリスト教の宗教史的な情況設定に重要な点を指向している。そのために、彼自身と他の学者たちの多量の研究成果を提供し、広く異なって不確かな点の多い見解の中で、何が一般に受け入れられており、また論争点であるかを簡潔・明瞭な文体で明らかにしている。

本書の内容は次の通りである。

一、緒言
二、一世紀のユダヤ教
三、黙示文学の意味
四、黙示文学の環境
五、黙示文学の特質
六、黙示文学と律法
七、黙示文学と知恵文学
八、黙示家の無責任性
九、黙示文学と旧約聖書
　ダニエル書、イザヤ書二四―二七章
十、黙示文学と新約聖書
　マルコ福音書、黙示録
十一、黙示文学と新約聖書

モリスは最近の新約学がキリスト教神学の起源を黙示文学の思想に求める傾向があることを認め、それらを主張する学者の見解をいくつか列挙している。たとえば「黙示文学はキリスト教神学の母である」と断言するE・ケーゼマン。「新約文学を統制する要因」と考えるD・フリードマン。そして「新約記者たちが釈義的、神学的思想構造に関しては、旧約―外典―黙示文学へと受けつがれている生ける伝承に根ざしている」と確信するE・シュタウファー。「新約の中心的象徴（復活・神の国・メシヤまたはキリスト）は黙示文学の象徴である」とするW・ビアーズリーなどである。一方このように躊躇なく黙示文学を受け入れる見解は、新約聖書が黙示文学的背景に対立していると考える者たちに大きな衝撃を与えるし、ケーゼマンらの見解

啓示、象徴性、悲観論、天地異変、神の勝利、決定論、二元論、偽名、文体、歴史の再録、倫理的教訓、予言、歴史的展望

に真向から反対するG・ロリンスの主張を取りあげている。しかしモリスは、ロリンスの力説する「黙示文学を織物の撚り糸の一本にすぎないものとか、キリスト教神学の概念は、黙示思想に先行している」との見解を受け入れがたいとしている。と言って急進的な見解をそのまま認めるのでなく、「ケーゼマンと同じような立場にある批評家たちも、新約聖書のキリスト教の特質が根本的に黙示文学であると理解することは困難である」ことを示し、更にG・エーベリングの見解を引用して、新約聖書と黙示文学の重要な相違を指摘した後、「キリスト教が黙示文学にその概念と表現のために、借りがあるものと見なすことには言うべき事がある。それはキリスト教の出現に多大な因をなすものとして、黙示文学運動を理解したり、新約文書がその特質において、本質的に黙示的なものであると理解することとは全く別のものである」と考えている。しかしまた「我々は新約聖書の使信の背景として、黙示文学を受け入れなければならない。我々は新約聖書の重要な部分を黙示文学の知識なしに理解することはできない」と言い切っている。

モリスは本書でこのような前提のもとに、盛り沢山の各主題を取り扱っている。紙数がなくて各項目の紹介ができないが、どれもキリスト教神学とのレレヴァンスを知るために大切なものであり、黙示文学研究への手がかりを与えてくれるものである。

是非、一読をお勧めしたい書である。

（御坊バプテスト教会牧師）

H-D・ヴェントラント著　塩谷饒、泉治典訳
NTD新約聖書註解　第七巻
『コリント人への手紙』
一九七四年　NTD新約聖書註解刊行会

村瀬俊夫

このたび無教会系の方々が中心になっているNTD新約聖書註解刊行会の手で、NTDの略称で日本の多くの聖書研究者に名称だけ知られている Das Neue Testament Deutsch 全十一巻の邦訳刊行が実現を見るに至ったのは、ドイツ語の原書を自由に読めない日本の多くの聖書研究者にとって、ほんとうにありがたいことである。これまでに第十一巻「ヨハネの黙示録」（一九七三年十二月）、第七巻「コリント人への手紙」（一九七四年五月）の二巻が刊行されたが、予想以上の予約申込者が与えられて、全巻刊行への見通しが立てられていることは喜ばしい。

このNTD翻訳刊行のためには長い準備期間があり、監修者・翻訳者の研究会が何回か、時には泊り込みで行なわれたと言う（「NTD新約聖書註解付録1」の「ごあいさつ」）。監修者は関根正雄、秀村欣二、高橋三郎、杉山好の四氏で、みな高名な無教会系の聖書学者、研究者である。そのほか翻訳担当の十数

名の方々も、みな無教会系の聖書研究者、学者である。既刊の二巻を見て、「さすが無教会系の方々の仕事はちがうなあ」と感じさせられた。翻訳の文章が日本語として読みやすいのは、準備の研究会で最近の言語学に基づく翻訳理論について学んだ成果であろうか。印刷・製本もすぐれており、NTD新約聖書註解刊行会の行き届いた良心的な仕事ぶりに、心から敬意を表したい。

ここに書評として取り上げるのは、第二回配本として刊行された第七巻「コリント人への手紙」の註解である。著者ハインツ-ディートリッヒ・ヴェントラント（Heinz-Dietrich Wendland）は一九〇〇年の生まれで、二十世紀をそのまま生き抜いた現在七十四歳の新約学者である。ハイデルベルク大学の私講師を皮切りに、キール大学、ミュンスター大学の教授を歴任した。新約学のほかに社会倫理の分野に造詣が深く、『社会倫理学序説』(Einführung in die Sozialethik, 2 Aufl. 1970) の著作がある。最近はNTD、補遺第四巻『新約聖書の倫理』(Ethik des NT, 1970) を出している。

NTDは一九二六年に企画され、十一年の歳月を費やして一九三七年に一応の完結を見た（その時の編集責任者はパウル・アルトハウスとヨハネス・ベーム）。しかし、その後もたえず改版したり、執筆者を変えて内容を一新する努力をかさねてきた。そういうわけで、現在翻訳・刊行が進行中のNTDは、当初のものとは面目を一新している。ヴェントラントの「コリント人への手紙」註解も、そうした新しい研究成果を盛り込んだ新鮮な内容のものである。本書は邦訳A5判で五三八ページにおよぶ大著であるが、語学的・文献学的な説明は殆んど表面にあらわれず、もっぱら神学的に筋の通った説明を展開することに意を用いている。非常に学問的でありながら楽しく読ませる内容のもので、専門家だけでなく一般信徒をも対象にしたNTDの特色が遺憾なく示されている。評者がくどくど説明するよりも、直接本書の内容に触れていただく方がよいので、左に第一の手紙一章2節の註解の一部を引用・紹介したい。

〈次に、コリントの集会の特徴が二つの句で記されている。それはまず第一に「神の集会」である。神が集会をつくりたまい、集会は神に属する。まさにこのことが、およそ考えられるかぎりの人間の集まりの形態から集会を区別するのである。われわれが「集会」(ゲマインデ)と訳したギリシア語の ekklesia エクレシアは、旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）にもとづき、原始教会の中に起こった自称であり、まことのイスラエル、神の選民であるという原始教会の主張を表わしている。そこで、パウロの手紙の中で「エクレシア」という言葉に接するとき、われわれはつねにヘブライ語のカーハール (qahal)、すなわち神の民、この世における神の召集部隊という含みを読みとり、そう訳さなければならない。

次に、コリントの人々は神に属する者として「聖徒たち」

である。この考えは、三重に規定されている。第一に、彼らは聖とされたのであって、彼らを新しい存在に移した神の行動を身に受けている。第二に、この聖化はキリストとの交わりにおいて起こる。第三に、神によって召された者だけが聖とされたのである。パウロはおそらく、この手紙が集会内の多くの不品行（とくに五1以下、六1以下参照）を指摘することを考慮したからこそ、二度にわたって、神とキリストの中に根拠をもつ集会の聖なる性格を強調したのである。それは道徳的行為や人間の徳という意味に誤解されてはならない。聖化はキリストにおける神の賜物である。……聖化は「神のなしたもうことであって、人間のわざではない」（ブルームハルト）。むろんこの言葉は、神から賜わった聖さが、キリスト信徒の行動生活になんらの道徳的成果を伴わなくてもよいかのように、誤って理解されてはならない。パウロにとって、「善い行い」、すなわち兄弟と隣人に対する愛の行為を伴わないような聖化は存在しないのである。聖徒という新しい存在は、受けることと行うこととの二つを含んでいる（八1以下と一三章）。この手紙の全体が、集会をさまざまな罪から、この新しい存在へ呼びもどしている〉（三〇、三一ページ）。

さらに第一の手紙の解釈で難解と思われる個所で、評者が読んで教えられた点を二、三あげてみたい。まず七章36—38節の「処女と結婚させることについて」の個所である（一三一—一三三ページ）。新改訳によると、ここでパウロは、ある父親が適令期の娘（処女）を結婚させるべきかどうかを決めなければならない状況を述べたことになる。しかし、この解釈では36節の終わりで主語が変わり、「彼らは結婚すべきである」となっている理由を説明しにくい（新改訳は「彼らに結婚させなさい」と訳している）。また37節に見られる四通りの意志の堅固さを示す言葉を、父親に適用するのには少し無理が感じられる。それに対して最近では、パウロはここで、性交しない「霊的結婚」の習慣がコリントにあったことを前提にしている、と主張する解釈が採られている。しかし、この解釈は38節の「結婚させる」という言葉と矛盾する。そのため、その個所のギリシア語を無理に「結婚する」と読もうとする（聖書協会口語訳はそうしている）。しかし、それは無理である。著者は、パウロが霊的結婚のような形式的結婚を認めた可能性は全くないと言う。そして、ここで言われているのは「男とその婚約者との関係」（キュンメル）であるとする。これは一番無理のない解釈のように思われる。

次に、パウロが霊の賜物としての「異言」を評価している一四章を見たい。13—15節の註解で、著者は「異言は理性を排除するような霊の働きである」と言う。そして次のように述べる。いまやパウロは、〈霊だけでなく理性もまた活動することを望んでいる。なぜなら、集会は理性を排除するような霊の働きによって益を受けることはないからである。彼にとっては、意識

された霊の生命としての思考もまた神の霊の働きに仕えるものとなることが、いっそう重要なのである。まさにその点を指摘して、彼はコリントの人々に反論する。彼らは異言を特別に高く評価したが、その理由はおそらく、異言の中には全く「超理性的な」(理性を超えたところで行われる)忘我的な人間の興奮があり、そしてまさにそのような状態において超自然的なものが自然な霊的生活の中に突入してくることを彼らは認めたからである。パウロはそのような彼らに対して、理性それ自体の権能を主張するのではない。パウロ自身確かに異言を語る者であり、コリントの人々以上にそうである。(18節)。彼はかえって、理性を越えてゆく霊の働きを集会のために高く評価する。だがパウロはこの文章によって、ある大きな問題を提示したのである。彼は、成立して間もない教会が忘我的宗教の狂気といれんの中に落ち込むことを阻止したのである。……確かに霊は忘我的な働きを持ち、不めいりょうな音声の異言をもたらすだろう。けれども、それは霊の唯一の表現形態ではなく、霊はそれに縛られていない。神の霊は集会における啓示であり、したがってそれは、単に理解不能な忘我的発語を引き起こす力よりも、ずっと大きいのである〉(二五九—二六〇ページ)。

もう一つ、パウロが「死人のために洗礼を受ける人たち」に言及している一五章29節について、著者が述べていることを紹介しよう。〈彼(パウロ)はまず、死人に代わって洗礼を受けるというコリントで行われていた風習をとりあげる。それは「おそらく自分の洗礼の際に」(シュニーヴィント)であっただろう。このいわゆる代理洗礼の意味は、洗礼を受けずに死んだ人(とくに身内の者)を、サクラメントの恩恵にあずからせることにあった。古代キリスト教会の種々のセクト(マルキオン派、モンタヌス派)の中でこの風習がずっと維持され、またディオニュソスの密儀においても、潔めを受けずに死んだ人のための代理の潔めが行われていた。パウロはここでこの風習を攻撃してはいないが、積極的に支持してもいない。彼はコリントで行われていたこのことを、ただ例として用いるだけである。すなわち、それは死人の復活が存在し、それゆえ「代理の」洗礼を受けることによって、すでに死んだ人が洗礼を受けたキリスト者として復活する者と等しいと認められるかぎり、意味を持つのである。この風習は、明らかに集会内の若干の人たちの間に見られた。おそらくは、復活否定論者自身によってさえ行われ、そこでパウロは彼らの矛盾に満ちた態度を指摘したのである〉(三〇四—三〇五ページ)。

緒論の問題について著者は、第一の手紙の統一性は認めるが、第二の手紙の統一性を否定し、一〇—一三章は中間の手紙(いわゆる「涙の手紙」)の主要部分であったと見る。六章14節—七章1節の「黙示文学的・勧告的」部分、および募金問題を論じた八章と九章は、全体から切り離すべきであるとする。それからパウロが使徒職の栄光を述べた二章14節—六章13節と七

章2—4節は、神学的に最も重要な部分をなすが、中間の手紙の前に書かれたとする。しがたって、第二の手紙の主要部分の成立順序は、①使徒職の弁明(二章14節—六章13節、七章2—4節)、②涙の手紙(一〇—一三章)、③和解の手紙(一章3節—二章13節、七章5—16節)であったとする。そして①と②の間に、パウロの短期コリント訪問があったと見る。著者は、このように第二の手紙の文献学的統一性を否定しても、その神学的統一性を主張する。それはパウロ使徒職についての一貫した把握が手紙の主要部分をつらぬいているからである。それは「キリストとともに苦しむ苦難の神学」である。〈パウロはキリストの苦難と弱さを己が身に持ち回る。使徒の実存は、数え切れぬ苦難と悩みと試練と危険の中にある生である。使徒を満たす神の聖なる霊と、神から出るこの務めの栄光は、まさに栄光と反対の苦難の中に現われるのである。キリストの力は、ただキリストに仕える者の弱さの中にあってのみ強い。恩恵にあふれるとき、苦難は彼から取り除かれない。キリストとの交わりにあずかろうと欲する者は苦難を受けなければならない。パウロはこれこそまさにキリスト者の実存の鉄則であるとする。苦難の神学が手紙の三つの主要部分を結びつけ、これによってパウロと敵とのこの上なく鋭い対立が明るみに出る〉(一八ページ)。

おわりに、さらに本書(あるいはNTD)を特色づけている二つの点を指摘しておきたい。その一つは、註解の随所に挿入されている付説である。「パウロの身体観」「パウロの結婚観」「パウロの倫理について」「パウロの教会観」「パウロにおける霊の働きと異言」「パウロと史的イエス」「魂の天への旅」など二十項目が取り上げられ、神学的洞察が深く、非常に参考になる解説が加えられている。もう一つは、聖書本文が著者の私訳によっていることである。本書はそれを訳出しているので、その聖書本文から教えられる点が少なくないであろう。本書の全体を読み終えて評者が感じたことは、ドイツの聖書学者はドイツ人独特の読みの深さを持っている、ということである。NTDの邦訳刊行は、日本人の聖書の読み方に新しい道を開くのではないだろうか。

(蓮沼キリスト教会牧師)

Nigel Turner
GRAMMATICAL INSIGHTS INTO THE NEW TESTAMENT
T. & T. Clark., 1965, pp. 198

瀧浦　滋

神戸改革派神学校の卒業論文として、ギリシャ語動詞の時制の効果について、若干考察した。その際、本書から教えられる

ところがきわめて大きかったので、その範囲で知りえた本書の価値を紹介して書評にかえたい。

著者の N. Turner は、J. H. Moulton が着手した *A Grammar of New Testament Greek*, 3 vols., (1906–1963) の第三巻 (Syntax) を完成させた人である。その二年後に本書は出版されている。しかし、本書はその第三巻のやきなおしではなく、その第三巻で種々の制約により犠牲にされた興味深い文法論議の多くが、新約聖書のテーマや人物の性格を文法から解明するという具体的な目標のもとで、自由に詳述されている本なのである。いわば、新約釈義に対する新約ギリシャ語文法のかかわりの機微を、大きな仕事をなしとげた学者が余熱を駆ってときあかした、新約聖書についての文法的随筆集というところだろうか。目次の大要は以下の通りである。

緒論　なぜ文法をするのか？

1. 神についての文法
2. ナザレのイエス
   (イエスの誕生についての文法家の瞑想　山上の垂訓における文法　他　)
3. タルソのサウロ
   (サウロの旅行と統語論　他　)
4. パウロの教え
   (神秘的 ἵνα　他　)
5. 聖ヨハネ
   (聖ヨハネの命令法の ἵνα　他　)
6. その他の記者
   (ルカ・黙示録記者・ヤコブ・ペテロ・ヘブル書記者)
7. イエスとその弟子たちの言語

従って本書は、座右に置いて絶えず引照する本というよりは、新約聖書を読む上で文法研究のもつ意義の豊かさと限界とを把握し再吟味しようとするときに価値を発揮する本である。N. Turner 博士は、「なぜ文法を学ばねばならないのですか？」「文法の研究によって何を期待すべきで、何を期待してはならないのですか？」という質問に対し、新約聖書の実例をとおし、誠実な熱心さをもって対話を試みている。この博士の推論を忠実になぞってゆくとき、あらいだされてくる事実は、霧の晴れるような、文法による新約聖書のクリアーカットの諸断面である。文法は新約聖書のことばの輪郭を実に正確に際立たせるものだ。文法をどう扱えばそのようなクリアーカットが可能なのか、そのことを、この本の各頁は手をとって教えてくれる。近道はない。博士と共に一つ一つの実例を文法で明らかにしてゆく作業をつみかさねる他はない。「塵埃によってそこなわれ、誤用の傷あとによってみにくくされているイメージは、注意深くもとにもどされてもう一度意味深いシンボルとなるまで、その使信を伝達することができない。」この発言にあらわされている、ことばの形態のもつ細部にわたるイメージを識別する力へのかたい信頼と、その本来のイメージを識別する力に

肉薄してことばをもとの意味深いシンボルにもどそうとする根気強さとは、N. Turner の本領のように思われる。それは一見強引に見えることもあるが、冷静な学的な裏付けを有している論議でもあり、それだけに魅力的なものである。ただ注意していただきたいのは、一口に文法といっても、N. Turner の念頭においている文法は、各ことばを切りはなしてその形態や語源・語意を探るたぐいのものではなく、統語論であるということである。文法研究が聖書のクリアーカットに資するためには、生きた文脈を切りきざまずそのままに把握し分析し明確化するところの統語論がとらえられなければならない。文法だけでものをいう鼻もちならない強引さと、N. Turner のもっている魅力的なほど強引にみえる聖書のことばづかいへの切りこみとの相違は、文脈を学的に把握してものを言っている統語論の価値なのである。ここに N. Turner の秘密がある。N. Turner も、統語論が必要ほど学ばれておらず、語源研究等に比して文献も少なく学びが困難であることを指摘しているが、日本の福音的クリスチャンが、聖書を無謬の神の言の権威と生きた文脈とにおいて学ぼうとするとき、この統語論的アプローチの文法書が、日本語で普及していないことは残念なことである。その意味でも本書は統語論の実用的価値を示していて刺激を与えてくれる。統語論は特別なものではない。万人の文法である。どこの神学校でも学生は多くの時間とエネルギーとをさいてギリシャ語を学んでいる。しかし、実際の釈義を説教準備や神学研究に際してすすめていこうとするとき、ことばの研究の繁雑さと限界とにたちまち直面して、たいていの人は文法書などどこかにほうりなげてしまう。そこには十分同情に値する説明不足があると思う。それは文法が無味乾燥で衒学的な形態論の反復記憶作業にとどまっていて、統語論を扱うまでに至っていないことに関係があろう。格変化や時制変化が記憶にあっても、それが文脈に与えるイメージの変化についての正確な知識に乏しいとき、その文法知識は衒学的アクセサリーにすぎず、実用に至らない。反対に、語形変化が文脈に与えるイメージの変化を一つ正確に把握するならば、確実に一歩聖書の文脈の中にすすむのである。文法は万能ではない。文法用語で神の言をバラバラにしても神の言がとけるわけではない。しかし、文法を投げ捨てて素手で聖書と取り組むことは、思いあがった行為で、せいぜい自己満足しか帰結しない。では文法は何のためなのか。文法は文脈のためである。統語論は、各語の形態の相違と変化が文脈に与えるイメージの変化についての正確な知識を私達に提供する。それを聖書に適用することは、神の言の文脈中に、一つ一つ正確なイメージの識別信号を配置してゆくに等しい。その作業はたしかに微視的だが、異国語の文脈を把握するためにきわめて有効であることは確かだ。文法を軽視する者は、文脈を軽視するといえるのではないだろうか。本書はその意味で聖書の文脈のきずきあげるイメージをより明確に識別する力を養うのに格好の手引きであり、実例集である。

本書の扱う主題であるが、不変化詞（前置詞・接続詞等いわゆる particle）の選択ないし有無によるイメージの識別や、名詞の格・動詞の時制・法などの選択によるイメージの識別について、多くとりあげている。その他、語順・省略・数・句読法・冠詞の有無等によるイメージの変化・識別に関することも多い。これらの基本的文法は周知であり、形態もシンプルで、衒学的に変化形を分析したり語源を探ったりすることが、あまり役に立たないことが多い。大切なのは文脈の中でこれらのことばが機能し識別するイメージを明確に区別して読みとることである。そうすることによって、無意味な同語反復や、記者の恣意的選択として読みとばしてしまうことばが、実は微妙なイメージをえがきわける筆先であることがわかってくる。神学的ニュアンスの多くは、正確な文学的ニュアンスにおいて表現されることがあるから、本書の扱っている主題の理解はより重要である。

たとえば、N. Turner は、冠詞の有無の効果を、「真理」ということばを巡って論じたのち、ヨハネ18・37 38をとりあげる。『わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。』ピラトはイエスに言った。『真理とは何ですか。』前二者の真理には冠詞があり後者にはない。そこで N. Turner は言う。主イエスは、人格化され神の属性として知られた「真理」について言っておられるが、ピラトは、典型的にギリシャ的ないし哲学的意味での抽象概念としての真理を考えているのだと。ヨハネの筆先は、冠詞一つで主とピラトとの絶望的なイメージのすれちがいを描きわけているわけだ。

F.F. Bruce は、Evangelical Quarterly 誌（1966, No. 4）で本書を評して、特に時制をとりあげた用例に注目している。新約聖書は動詞の Aktionsart の区別に極めて敏感だという点である。たしかに本書は二十個所余りで時制を扱っている。Aktionsart とは、ギリシャ語の「時制」と通称される語尾変化によって識別されているイメージのことで、その動詞の行為が瞬間か（アオリスト形）継続か（未完了・現在形）完了か（完了形）との区別を意味する。事柄が動詞にかかわる重大なものなのに、「時制」という偽名に災いされて一般に見逃されやすい区別である。特に新約聖書ではこの行為の種類を描きわける感覚がきわ立っているのに、一般に邦訳はそのイメージの精緻さについていけない。マルコの筆に対する N.Turner の指摘を二カ所ひろってみよう。5・28 29の長血の女のいやしの時制による情景描写心理描写は明確である。彼女は以前からずっと思っていた（未完了）御衣にでもさわれば（接続法アオリスト、未来におこる瞬間を目で見るように考えていたことを示す。）なおしていただけるだろう（起動アオリスト）と、そして、主にふれると即効的に血のもとがかわいた（アオリスト）。そのことを彼女がただちに実感した（アオリスト）ほどに。6・41の五千人養いでは、主が食物を配られるに際し、感謝し（アオリスト）パンをさき（アオリスト）弟子達に渡して配らせられた（未完了）。これは弟子の繰返して配餐に立回る情景をそれに先立つ主の動作と対比している。主の行為に集中していたイメージが、群衆の鳥瞰へと展開してゆく。

このように、神の言がそのはしばしをもおろそかにしないで精緻なイメージを描いてゆくことを本書は確信させてくれるのである。

（改革長老教会協力伝道者）

K・スキルダー著　山中良知訳
『キリストと文化』

一九七四年　すぐ書房

村川　満

Klaas Schilder の名は、ヴァン・ティルの *Common Grace* (1947) 中で紹介されて以来、われわれに親しいものとなっているが、その著作はオランダ語で書かれており、英語にも、『苦難のキリスト』三部作と『天国とは何か』（抄訳）が訳されているだけで、それも現在入手できるかどうかわからない状態なので、一部の篤学な人々を除いては、実際にはほとんど読まれていないように思われる。このようなときに、彼の主著の一つである『キリストと文化』（一九四八年初版、一九五三年再版）が、山中教授によって、オランダ語から訳されて、日本語で読めるようになったことは、特筆に値することだと言わなければならない。

この書は決してたやすく理解できる書物ではない。凝縮された内容が簡潔な言葉で表現され、神学・哲学・文学など多方面にわたる広く深い知識が、鋭い論理と暗示的・逆説的・詩的表現をもって提示されているので、著者の議論を追い、著者の真意を捉えることはなかなかむずかしい。それだけに訳出の苦労は並大抵のものではなかったと思われるが、訳者は、読者の理解を助けるために、本文の前に第一部として、「スキルダーの『キリストと文化』について」という、原著の内容を要約紹介する行き届いた解説を、三一頁にわたって、付しておられる。又、第二部は、『キリストと文化』の訳文であるが、その最後につけられた注も、主として著者の立場と議論の筋道を明らかにしようとする訳者の個性的なコメントであって、これも読者の内容理解を大いに助けてくれて、甚だ有益である。更に第三部として最後に、「スキルダーの生涯と思想」という解説が付けられてあり、これによって本書を、著者の生涯と思想全体の中で理解する道が開かれている。このように、難解な原著を読者に近づけるために、大きな努力が払われていることがわかるが、それら全体を通して、訳者のスキルダーに対する共感と傾倒がにじみ出ていて、それがまた本書の魅力となって、読者を

スキルダーの世界へと誘う働きをしているように思われるのである。

本書の内容は簡単な紹介は許さないようなものであり、幸いに訳者による詳しい解説が付せられているので、ここでは主題に対する著者のアプローチの基本的方向を紹介するだけにとどめたい。

さて、「キリストと文化」という論題は、「キリスト教がこの世界のうちにあるかぎり、人間の心をとらえ、心をうばう事柄である」（四一頁）が、これまでのアプローチは、一方では、キリストと文化を対立的に考えて、どちらかを犠牲にすることによって、他方を強調するか、両者を別次元のものとして、峻別するかの方向がとられ、他方では、両者を和解させ親和させる方向がとられて来た。しかし、このようなアプローチは、根本的に、キリストと文化とを正しい関係においていないとスキルダーは考え、あくまでも厳密に聖書にもとづいて、両者の関係をとらえてゆこうとする。彼の立場は、文化の問題から目をそらす敬虔主義と、福音を文化に解消する文化主義とを排して、人生のあらゆる領域に神の主権を認め、人生全体をあげて、神の栄光に仕えてゆこうとするカルヴィニズム、特にカイパーの立場に、基本的には一致する。しかし、カイパーの、一般恩寵による文化の基礎づけや、領域主権の考えには満足せず、もっと厳密に、聖書の立場を貫こうとするのである。

まず、「キリストと文化の関係についての問題は、キリスト教的思考と実践の根本に直結する。それ故、キリスト者は、たえず、この問題の解決のために戦い続けねばならない。この問題を放置する者は、自己の直接的召命を拒否することになる」（四三頁）と述べて、スキルダーは、文化に対して、非常に積極的な姿勢をとる。しかしそれは、一般に考えられるように、この世の文化を積極的に評価する、あるいは、この世の文化を前提として、それとキリストとを結びつけたり、キリスト教の立場からそれの基礎づけをしたりすることとは同じではない。そのような態度こそ、スキルダーのきびしく拒否するものである。「最も困ることは、キリスト教の信仰者が、文化の問題に触れるや否や、隣りの、ある不信仰の文化哲学を心配げに窺いみるその卑屈さである」（五〇頁）と言っている通りである。この点では、カイパーの文化観も批判をまぬかれない。カイパーは、罪によって破滅に帰すべきこの人間世界を保持し、文化の花を咲かせるものとして、一般恩寵を主張したが、スキルダーにとっては、このような主張は、「経験的立場に立つ」（一二〇頁）もので、厳密に、聖書から導き出されたものではないと判定される。つまり、カイパーのように、一般恩寵によって堕落後もなおわれわれに許されているものを、文化論の出発点にすることは、聖書に明示された、堕落に先立つ、創造における神の御意図、御命令を根本におかない誤りであり、文化を神の命令、人間の義務として神中心的にとらえず、人間に「なお許されていること」としてとらえるのは、人間学的であり、更に

「文化楽観主義的」である（一七六頁）。そして、結局、自然と自然の使用とを明確に区別しないことによって、信者と不信者との原理的対立をあいまいにすることになるとスキルダーは考える。これに対して、彼は、罪の現実からではなく、聖書から出発する。そして、聖書の第一頁に述べてある「園を耕し、土地に住み、増し殖せよ」という命令に、文化の根拠を見出すのである。すなわち、人間は「目的自覚的職務荷担者」（九五頁）として造られ、善く造られたけれども、未完成の「発展途上にある未熟の世界」（一〇七頁）を、完成にもたらす神の御目的に参加して、「神の協働者」（九五頁）となるつとめを負わされている。これが人間の文化活動であり、エデンにあっては、そのままそれが神礼拝であった（一一五頁）。つまり、宗教が生の一領域ではなく、生の全体を含むように、文化も、生の全体を含む活動であるから、両者は、本来一つのものなのである。従って、宗教と区別して、文化の領域を立て、「生活、文化のあらゆる領域で神の御栄光をあらわすべきである」と言うことは、問題を正しくとらえていないのであり（五五頁）、まして、文化を、一般恩寵によって、信者と不信者とが共有する領域であるかの如く語ることは正しくない。たしかに、信者と不信者とが分離されずに置かれているこの世界は共通の領域であり、与えられている自然、人間の文化衝動は共通であるが、自然を用い、材料を加工し、文化衝動にもとづいて、実際に活動するところに文化はあるのであって、ここにおいては、外見的に類似していても、原理的には、明確な区別・対立があるのである（一四一頁）。更に、「信仰から出ないすべてのことは罪であり……文化は『建設』を意味し、罪は破壊を意味する」から、信仰にもとづかない不信者の文化には、「積極的文化建設」の名と栄誉は与えられない（一三二頁）。これに対して、罪によって不可能となった、神の御意図に従って創造の賜物を使用するという「積極的文化建設」の仕事は、キリストが、第二のアダムとして来り給うことによって、再び可能とされた。その意味で、キリストは、救い主であるとともに、「文化の救済者」（一二七頁）となられたのである。それ故、このキリストによって新たにつくられた「神の労働の共同体」（一〇〇頁）によってのみ、その名に価する文化建設はなされるとスキルダーは主張するのである（一三九頁、一五七頁）。

このような主張は、あまりにも事態を単純に割り切るものであると言われるかもしれない。しかし、そのように言う人は、「歴史の中で歴史的にそれ自身の種子から継続的に果実を実らせながら効果的に作用する神の御言葉を知らない」（一五八頁）とスキルダーは言う。神の文化命令は「約束をともなう命令」であり（一〇八頁）、今やそれは「恩寵的福音的に獲得される」（一五六頁）。もっとも、キリスト者の文化は、歴史の中では未完成であり、特定の文化という形態をとることは期待されないし（一六〇頁）、最後の審判からも逃れられない（一六二頁）。にもかかわらず、「文化作業を不熱心にし、差しひかえること

は、いつでも罪になる」（一六七頁）。なぜなら、「キリスト者は文化に参加する義務をもっているからである。文化に参加しないことは、神の労働者の作業拒否を意味する」（一六二頁）。そして忠実に文化建設の義務をはたすとき、「終末では、第二のアダムから出ているすべての人が、永遠に文化の戦いの果実を得ることを許される」（一六四頁）のである。

以上の叙述は、本書のごく一部、また一面の紹介にしか過ぎないので、この著作には「聖書中心・神中心・キリスト中心・教会中心といった改革派神学思想の泉が、滾々と溢れ出ているのをみる」（三五頁）ということを十分に伝えることが出来なかったが、たしかに、この書は深く鋭く聖書の立場をとらえ、非聖書的思考と対決させていて、甚だ刺激的で、示唆に富んでいる。一読して理解できない点や、疑問点もいろいろあるが、紙数も尽きたので、それらについては、本書を再読し、更に他の著作も読んで、スキルダーの考えをもっとよく理解した上で、論じることにしたい。彼の他のすぐれた著作の邦訳を、訳者に更にお願いしたいと思う。いくつかの誤植、注の番号だけで注がないところが見出された。又一〇二頁の（ad rem）は「事柄に即して」「適切に」と訳すのが適当だと思われ、二〇〇頁のラテン文は、「彼は人間にかかわる事柄は何でも、自分に無縁と思わない」という意味である。再版の時に訂正されたい。

（関西学院大学社会学部助教授）
（日本基督改革派神港教会長老）

石原謙著『キリスト教の源流』

昭和四十七年　岩波書店

横山　武

著書を正しく理解するためには、著者の執筆の意図が奈辺にあるかを知ることが、まず大切であろう。この点で本書の著者は、カトリック歴史学者 Joseph Lortz が「Handbuch の様式を避けて……全く内面的な敬虔・信仰・神学思想の面に重点をおいてキリスト教そのものの発展を追求し、教会概念の涵養を指向している」*Geschichte der Kirche in ideengeschichtlicher Betrachtung* ① の記述法を高く評価し、「私もこれに倣って、かつ私自身の生涯の課題として追求して来た目標を目指して、キリスト教とは何かとの問を、その歴史を通して解くことを本書の目標としたかった」と述べている。さらに内容についても「その意味で私はキリスト教思想史を、一般世界史を背景としつつ論述することを試みたつもりである。従って典礼生活等を割愛し、異端的運動を始めキリスト教の支流と目せられる分派に重点をおく暇を惜しんだ。極端に言えばキリスト教の本質的展開を明らかにするためにその教会形成と発展とを主流として叙述の中核となし、これを完成するのに役立つ限りにおいて、

分派支流の運動を補足するに留めた」と記している。そしてこの姿勢は、全篇を通して貫かれており、とくに第一部の初代教会の時代を取り扱った部分の理解のためには、記憶しておく必要がある。テキストブック的な単なる出来事の陳述は、そこにはない。

さて内容であるが、本書はもともと、同じ著者によって続いて出版された「キリスト教の展開」に先立つものとして出されたので（これらは各々、ヨーロッパ・キリスト教史上巻及び下巻という副題がつけられている）、時代範囲としては、原始キリスト教からはじまり、いわゆる古代キリスト教史と呼ばれる部分の時期を取り扱っている。おもな項目は次のようである。

第一部　キリスト教の起源
第一章　キリスト教史序説
第二章　原始キリスト教
第三章　キリスト教のヘレニズム化
第四章　ローマ帝国とキリスト教
第五章　帝国教会の東西分離
第二部　カトリシズムとアウグスティヌス
第一章　カトリック教会の成立
第二章　アウグスティヌス（前半生）
第三章　アウグスティヌス（教会司教）
第四章　アウグスティヌス（神学）
第五章　民族移動と中世期への過渡期

以上の項目のすべてについてその内容を紹介することは、紙面の都合で勿論できないことであるが、第一部三章のキリスト教のヘレニズム化は特に興味深いもののひとつである。著者は、そこで、(1)第二世紀のキリスト教、護教家、(2)ユスティノス神学思想、(3)第三世紀の教会と神学、(4)アレクサンドリア教校の神学、(5)ローマ帝国に対立する教会、その孤立と迫害、と論をすすめるのであるが、当時の教会が直面しなければならなかったヘレニズム世界に対するキリスト教会の弁証的な試みの危険について次のように指摘する。「彼等は必然的に全人類に共通する理性的真理に訴え、キリスト教が、対手のギリシア人もまた承認せざるを得ない哲学原理ロゴスの完全な実現であることを論証し、この信仰に反抗し圧迫することの不合理なゆえんを弁駁しようとする。すなわちギリシャ哲学思想の援用によって、キリスト教的 Apologetik の論理を樹立し、学的にその真理性を先取しようとしたのである。……異教主義と争うために合理主義的な真理認識の方法を適用し、一般的な『学』を意図したので、その点に固有の意義が存するが、同時に教会としてはこの異質的な原理を敢て承認し摂取するという問題を惹起した訳である。キリスト教がヘレニズム文化世界に新しい地盤を求めるに当って、自から備えなければならない冒険的な課題であったのである。」そして、キリスト教が異教的世界に進展しようとした二世紀におけるヘレニズム化の代表的人物として、ロゴス・キリスト論を展開したユスティノスを挙げている。キ

リスト教の合理性をロゴス思想によって根拠づけようとし、ギリシャ哲学とキリスト教を同じ思想史的観点から批判しようとした彼の試みは、多くの論のあるところだが、その積極的、大胆なアプローチは示唆に富むものである。また彼がロゴス思想によってキリスト教の合理性を根拠づけようとしたのみでなく、これを聖書の権威によって論証しようとしたことは、「神学史上における聖書主義の立場の始ま」りであり、この点で彼のキリスト教神学思想史上の位置の重要性が主張されている。

ヘレニズム化にとってもうひとつ重要なものとして、アレクサンドリヤ教校の存在が挙げられる。これはクレメンスからオリゲネスへ続く指導者たちが出るにおよんでその名声が高くなり、三世紀中葉頃には一般社会からも注目をあびて、当時有名であったギリシャ哲学の新プラトン学派と肩を並べるほどであったと言われており、当然、当時のキリスト教界の最高の神学研究の場と評されていた。なかでも、オリゲネスの「原理論」は「ギリシア哲学の学統に対してキリスト教哲学の立場を論証しようとする意図」で貫かれており、「内容においても異教哲学と対決するために、却ってその問題の展開と推論において教会伝承の枠を越えた点がなくはなく、後に教義的論争に際して問題視され」ることがあったとしても、「彼の神学においてキリスト教は初めてギリシア哲学最後の結論としてのプロティノスと対決し、思想的な邂逅、折衝、協調を試み、時には妥協もあり失敗もなくはなかったが、一致調和もされたのであり、」「オリゲネスがこの哲学と邂逅し摂取したことによって新しい方向が示唆されることを得た。そこにオリゲネスの学業のヘレニジールンクの歴史的意義があり、クレメンスはそれを誘導した功績をもつ」と言う。ヘレニジールンクの問題は、キリスト教宣教論と土着化の面からも、今日的な課題に示唆をあたえるものであるといえよう。

また本書は、前述の全体の項目からもうかがえるように、約半分に近いスペースが、アウグスティヌスを含む西方ラテン教会とその神学の記述にあてられている。著者は言う「カトリック教会の形成確立に取って主動的役割を占めたのは言うまでもなくローマである。しかしローマのキリスト教の起源は詳かでなく……むしろ史実に従えばパウロのヘレニズム世界への宣教の収穫と言うべきであろう。」そしてローマの教会は、一般社会においてラテン文化が盛んになるにつれて、その信仰、慣習その他の点でラテン的性格を強くもつようになる。したがってギリシャ地域のエクレシアとは、救主イエス・キリストを信じる点では同じであっても、民族的、文化的な相違に基づく、異なった特徴のエクレシアが生れてくることになる。そしてこの事実は積極的な意味をもち、著者は次のように評価する。「このような宗教の態度はローマ人固有の法的性格に対応し、キリスト教の宣教に対してもこれをローマ化して受容しようとする過程を意味する。けれどもそれは単なるキリスト教のローマ土着と言うべきではない。……むしろ法の内容を全くキリスト教

化し、福音的生活と教会的信仰の実践に当って単に内的情熱のみに頼らず、これを法的秩序の問題として重視し、かくてヘレニズム的な動揺変化し易い『エクレシア』ではなく、組織と規制のきびしい法的団体としての『教会』を形成した。……故にこの教会が発展したときに確乎たる小国家を形成し、国家権力との対立激化を免れないが、よく異教的流行に反抗し国家の迫害にも堪える力を養い得たのである。キリスト教が三百年に亘る迫害に屈することなくローマ帝国との戦いに勝つことを得た主要な原因は、このローマ的精神の教化に由るところが大きかったと思われる。」

つぎにアウグスティヌスについて言及すべきだが、紙面の都合で割愛する。

本書は、副題が示すように「キリスト教の展開」と一緒になってキリスト教の歴史的流れを取り扱っているものなので、その上巻と言うべき本書には索引はついていない。研究者をも含めた人名索引が「キリスト教の展開」のほうについている。内容の性質上止むを得ないことであろう。ただ事項索引は両者になく、それを補うかたちで、シノプシスが二十数頁にわたり「キリスト教の展開」についている。読者にとっては事項索引があれば活用し易かったと思われる。さらに、参考書が本文中に数多く挙げられているのでそれらをまとめた参考文献目録があったら、後学のための良き援けとなったのではなかろうか。また本文中に外国の言葉（おもにテラン語であるが）の多いのも、キリスト教史になじみのうすい読者には理解の不便さが伴うのではなかろうか。

とにかく、単なる事実の記述でなく、考えながら読み、読みつつ考えさせられる種類の本であるといえる。キリスト教の歴史性が再び問われつつある今日、本書の語りかけは尊いものとして評価されよう。

① この本の日本語訳（重訳）が「教会史」神山四郎訳、一九五六年、ドン・ボスコ社である。

（中央バプテスト教会牧師）
（聖契神学校　講師）

G・R・エルトン著　越智武臣訳

『宗教改革の時代』

一九七三年　みすず書房

金田幸男

従来、宗教改革を扱った邦語文献は、決して少なくはなかったけれども、純然たる歴史学の所産であって、しかもヨーロッパ大陸における宗教改革を全般的に俯瞰しえる本書の刊行の意義は大きい。

ルターなり、カルヴァンなりの宗教改革者の生涯に重点を置いた宗教改革の取り上げ方、ルター派教会、改革派教会の「教会の進展」の歴史として扱う仕方、あるいは、ローマ・カトリック教会側からのアプローチといった個別的部分的著作も、それなりの有意義な視点を提供するものであるが、それらは、やはり、神学的な考察と反省の上に立つものという特質が強く浮き彫りにされてくる。しかし、それは、ともすれば護教的になり、あるいは自己の教派的立場を補強するための強引な解釈を施したり、宗教改革史をわれわれの時代の教会の諸状況に適用するのに性急となりがちである。その意味で、本書は宗教改革全般を冷静に透徹した目をもって記述し、公平な立場で諸党派の対立抗争を観察しており、神学としての教会史の取り扱う宗教改革史の諸労作と補完する役割を果たしている。

本書は、G.R. Elton. *Reformation Europe*, 1517-1559, London, 1963 の全訳で米国のハーパー社からもペーパーバックスで出版されている。著者エルトンは、ケンブリッジ大学のイギリス史の教授でチューダー王朝史を研究している歴史家である。訳者は、岩波文庫のトーニー「宗教と資本主義の興隆」の訳者でもある。

全体は十章よりなる。本書のような分量で十章にも区分し、全般的著述をなしているが、読了した印象では、通史でありながら、自明の事の列挙はなく、総花的とは言えず、簡潔で終始、深い洞察力を感じさせる。

目次。

一章　ルター、二章　カール五世、三章　勝利の年月、四章　急進派の動き、五章　ドイツ以外の改革、六章　諸党派の形成、七章　ローマの再生、八章　カルヴァン、九章　戦争と平和、十章　時代相

各章は更に数項に分けられている。

ルター、ドイツ国内のルター主義

宗教改革を代表する人物の一人がルターであることは間違いないが、彼の反抗が一つの運動となり、教会の統一と教皇の至上性を脅かした諸条件を看過してはならない。本書は、このルターの人格と神学思想が宗教改革を押し進めるにあたっての諸条件から、ドイツ国内の政治・社会的状況を抜きにして考えられないとする。(一章一)「たしかなことはドイツの状況がルターを援けたのである。」しかし「宗教改革は一人の人間によってできる筈のものではなかった。だが、もし、ルターがいなかったならばやはり宗教改革はなかったといってよかろう。」とエルトンは言っている。本書を、この宗教改革に対する視点が貫いている。事実、カルヴァンにも、ラジカリストにも適用される。

ルターが宗教改革を推進した時期は、一五一七年十月三十一

日のヴィッテンベルグ城教会の扉に九五ヶ条の提題をはりつけた時が決定的ではなく、早い時期に既にルターの神学の本質的な部分は形成されていたと認識するように要請し、皇帝の前で自説を撤回しなかったウォルムス国会を真の宗教改革の始まりとしている。これを境にして、政治・社会・外交の面に顕著なルター主義の現象があらわれる。

一人の人格の決意なり行動なりにではなく、実際の改革運動の顕在化を注視するところにエルトンの立場がある。この顕在化したルター主義の惹起する波紋の拡がりが三章に述べられる。そこでは、ヴィッテンベルグにおける改革、農民戦争に対するルターの姿勢、そして領邦国家とルター主義の結合が主要点である。

カール五世

ハプスブルグ家の統治者、カール五世は「正真正銘、中世皇帝の最後の人」とエルトンは言う。教会の分裂を終息せしめようとするカール五世の意志に反して、中世の終焉に相応しく、「戦争こそカール五世の治世の基調であった」と言われる如く、国民国家形成中のフランスその他諸国との拮抗の連続であった。このカール五世をめぐる宗教改革時の動乱、戦争は、三章二でやや詳細に記されている。

六章は、一五二九年以降のカール五世の、ドイツでの対プロテスタント政策が述べられる。一五二九年前の諸戦争に奔走していたカール五世も、それら戦争に勝利し、権力の絶頂にあるものとして、ドイツ国内の異端への善後策を講ずるに至る。一五三一年のシュマルカルデン同盟の結成に伴う対決及びオスマントルコの侵攻による同盟との妥協、そして、ヘッセンのフィリップの重婚問題によるシュマルカルデン同盟の弱体の好機まで。

九章は、レーゲンスブルグ帝国後の、交渉による平和回復の望みが潰え、カール五世とシュマルカルデン同盟との最後的決着。一五四六年同盟の敗北。にもかかわらず宗教問題を解決できないまま、カール五世の後退に終り、一五五五年のアウグスブルグの和議までを扱う。

本書の約三分の一は、カール五世に焦点をあてている。宗教改革史においては、ルター、カルヴァンにおとらずカール五世の果たした役割を評価しなければならないことを改めて教えられる。カール五世を抜きにしては、やはり、宗教改革史は、考えられない。

カルヴァン

八章で、カルヴァンとカルヴァン主義の進展が述べられている。カルヴァンは、ルター、ツヴィングリに比べれば「宗教改革の第二世代に属する。この事実が重要な意味をもつ」という指摘は当を得ている。まず、エルトンは、カルヴァンの若き時代と彼の性格の描写の後、「キリスト教綱要を評価しつつ、その神学を簡単に紹介している。護教的歪曲をするわけではないが、エルトンのカルヴァン観をそのまま首肯できるわけではな

い。例えば、彼の性格が冷酷であったという指摘。しかし、全体的にみて、特にカルヴァンの神学の叙述、予定論と聖書の権威に関しては的を得た論を展開している。

続いて、ジュネーブにおける教会改革の叙述（八章二）及びカルヴァン主義の拡大（八章三）が記されている。

八章三において、エルトンのウェーバー批判を垣間見る。経済決定論を歴史家が採用したことを批判し、カルヴァンの思想が「いわゆる中産階級に定着したことの証拠はない」とし、むしろ、フランス・ネーデルランドにおいては、カルヴァン主義の帰依者は、貧民層に、また、ポーランド等東欧では、反ドイツ的な民族主義的因で貴族の中にみいだされるとしている。

更に、もうひとつの大切な点は、カルヴァン主義が、ルター主義にとって代わって主流となり得たのは、ルター主義が、世俗権力そのものになったにひきかえ、カルヴァン主義は、教会支配のみならず世俗権力に対しても、「革命的」になってゆかざるを得なかったという指摘である。それが、カルヴァン主義の活力源である予定論の神学と厳密な教会組織と学校教育（特にジュネーブの）とあいまってカルヴァン主義が、反宗教改革の波を防ぎ、プロテスタントの牙城となりえた理由である。

（なお、本書一七〇頁の慈善事業と貧民救済に責任をもつ役職が長老職と訳されているが、執事職の誤りである。）

予定の原稿のページがつきたので、終りは簡単に紹介する。

四章は、急進派で、ドイツ農民戦争をめぐるミュンツァーらと、チューリヒの再洗礼派の系譜に連なるラジカリズムを描く。

エルトンの急進派への評価は、急進派を助長した社会経済状態はひどいものであり、平和主義的セクトでさえ、既存の権力機構に対する反対感情が含まれ、公然と表明された面を指摘し、「要するに、非合理な、心理的なバランスを失した、幻想から生まれた一つの暴力現象に他ならぬ」と結論している。

五章は、南欧・西欧・北欧・東欧におけるルター主義の勝利と挫折が描かれている。

七章は、ローマ側の反宗教改革の群像が刻明に描かれている。

十章は、宗教改革の文化に対する貢献が描かれている。

本書の宗教改革に対する視点の全てが、受け入れられるというものではないけれども、通念として言われていた事柄が、何度もくつがえされている点、多くのことを考えさせられる。

宗教改革時代を振り返ろうとする者には、一読の価値ある書である。

（日本基督改革派神港教会副牧師）

宗教学辞典

小口偉一・堀一郎　監修

一九七三年　東京大学出版会

矢内昭二

宗教は人間の歴史と共に古いが、宗教学は新しい学問です。宗教の学問の中でも、神学や宗教哲学に比べて、宗教学は最も新しい学問です。普通に、一八七〇年、マックス・ミューラーがロンドンのロイヤル・インスティチュウトで宗教学の講義を行なったのを科学的宗教学の誕生とします。日本では、一八九〇年（明治23）に井上哲次郎が「比較宗教」と題する講義を東京大学ではじめて行ない、同九六年には、岸本能武太、姉崎正治らが「比較宗教学会」を組織しました。こうした背景のもとに、一九〇五年（明治38）、東京大学に「宗教学」の講座が創設されるに至りました。昨年十月には、東京大学宗教学科の創設者姉崎正治教授の生誕一〇〇年を記念する事業が行われました。

本書は、このような近代科学的宗教研究の現況とその成果をわたしたちに提供してくれます。そういう意味で文字通り、「宗教学」の辞典であると共に、「宗教学の立場から書かれた」宗教辞典でもあります。英語のものでは少し古くなっていますが、ヘースチングスの「宗教と倫理の百科辞典」（一九〇八―一九二六）十三巻、ドイツ語のものでは有名なR・G・G（「歴史と現代における宗教」一九五七―一九六五、第三版）などありますが、日本には何故かこういう辞典がありませんでした。本書は分量的にいって、こういう大辞典にとうてい比較できませんが、兎に角、厳密な科学的宗教学の立場にたって、その成果をふまえて作り上げられた本書は学問の現段階において学的に信用できるだけでなく、こういう形で過去の宗教学的成果が総合されたことは、今後の宗教学の発展のためにも、共通の基盤を与えるものとして、大きな意味があると思います。今日宗教学はますます細分化され、宗教学内部での専門の分化はその度合いを深め、今後ますますそれが進んで行きますが、それと共に、専門分野をできるだけ緊密な体系に統合し、宗教現象を全体的に理解しようとする統合への努力ということが、専門の分化と共に現代宗教学の重大な課題となっている時に、本書の完成は、このような統合への努力の一つの成果だと思います。

本書は、15×22センチ、八一三頁の大冊です。四百項目が辞典的にアイウエオ順に配列されていますが、巻末には、四三頁にわたる詳しい和文・欧文の事項・人名索引という四つの索引があるので便利です。さらにこの四百の項目が七頁にわたる分類目次（Ⅰ宗教学と関連諸学　Ⅱ一般宗教用語　Ⅲ宗教思想　Ⅳ儀礼と修行　Ⅴ宗教と心理　Ⅵ宗教と社会　Ⅶ宗教と文化

Ⅷ宗教の類型と諸宗教）の下に体系的に整理されているので、一冊の宗教学概論としても使用することが出来ます。分類目次も細かく気が配られていて、例えば、宗教哲学、宗教思想などの項目は、まず、Ⅰ宗教と関連諸学の項目に出て来ますが、次に、Ⅲ宗教思想の、1世界観、の項目の下にも分類されています。分類目次が単に項目のよせ集めでなく、体系的視野から構成されているのです。

本書は、今までの宗教学の成果の総括としても、政治学や社会学など社会科学と宗教学の相互の対話のためにも、宗教者の実際的使用のためにもきわめて利用度の高い辞典です。特にこの最後の点について、二、三、感想をのべてみたいと思います。

第一に、宗教の問題についても、自分の宗教以外のことについては、事実についても、名称についても、内容や意味についても、私たちの知識はあいまいです。こういう場合、直接しらべることが出来ない場合にも、本書は一応正確な知識を与えてくれます。

第二に、自分の信じている宗教と他宗教を比較し、または自分の宗教をもっと広い宗教現象の中で検討することが非常に有益であり、また今日諸宗教の対話ということが非常に必要ですが、それには対話に必要な共通の言葉（これを本書は、学術用語の統一ということで考えています）と、相手についての正確な知識と相手に対するとらわれない態度とが必要です。こういう点から、正しい宗教学的知識や宗教学的態度が必要となって来ます。

第三に、今日正しく神学をやって行くためには、神学と宗教哲学と宗教学（広い意味）の関係を正しく全体的につかむこと、その固有の立場と方法と対象とにわたって、この三つの学問の区別と関連を考え、相互の学問の成果を正しく取り入れることが非常に必要になって来ています。このことは、勿論、神学を宗教哲学や宗教学に解消することでも、宗教哲学と神学を混同したりすることでもありません。まったく反対に、この三つの学問の存在の権利をはっきりとみとめ、相互に、他の二つの学問との対話や、他の二つの学問の成果や批判を受け入れることによって、健全な学問活動をやっていくことが必要だというのであります。特に今日、ぼう大な宗教学的研究の成果を神学や宗教哲学はもっと積極的に、真剣に受けとめなければなりません。

第四に、今記したように、今日、宗教について科学的宗教学の立場からの研究業績が多く発表されていますが、その他、政治学や社会学や人類学の専門の学者による宗教研究の成果も多く発表されています。こういう学問的成果を正しく評価し、活用する能力をキリスト教会はもっとしっかりと身につけなければなりません。そのためには、単に実用主義的、御都合主義的に、これらの成果を利用すればいいというわけにはいきません。これらの学問的成果を正しく取捨選択するためには矢張一

応、しっかりした「宗教学的見方」というものを身につけておくことが必要ですし、専門の学者という意味でなくても私たちが、神学的な考え方の他に、宗教哲学的考え方、宗教学的考え方というものを理解しておく必要があると思います。このために必要な、便利な「めがね」として、この「宗教学辞典」は非常に有益なものだと思います。

（改革派東京教会牧師）

加藤常昭著
今日のキリスト教双書—15
『福音主義教会形成の課題』
新教出版社

佐布正義

著者は、鎌倉雪の下教会の牧師として牧会の現場に立ち、日本の教会状況に見る諸問題と直接関わりつつ、一方では東京神学大学の教師として神学的なロゴスの追求にたずさわり、そしてそのかたわら本を書くという、忙しい日本の教職者の典型のような存在である。このように二足も三足ものわらじをはく働き手である以上、（加藤氏は一足のわらじをはいてあちこちかけまわっているだけだと言う。筆者もこのパターンなので大いに共感）なんといっても時間的制約などからは逃れられないのではないかと思うが、非常によくやっておられる。また同時に、そのような状況に身を置くが故に、伝道を論じる場合も、単なる方法論に堕することなく、神学的にも充分に吟味を加えた深みのあるものにすることができるのであろう。

本書は、そうした働きの中で書かれた既発表の論文などから、この表題のもとにまとめた四百ページほどの論集である。著者のまえがきに明らかにされているように、本書の内容は三部から成り、第Ⅰ部は、実践神学に関する論文ふうのもの。第Ⅱ部は、雑誌へ寄稿した文章。第Ⅲ部は、講演を収録したものである。

先ず、第Ⅱ部について見ると、一九六二年から六九年の間に、「福音と世界」、「教会教育」、「聖書と教会」等に発表された十篇をそのまま集めている。読者にとっては、記憶に残っているものが多くあることではあるが、このセッティングに集められたものを読み返すと、著者が模索する教会のイメージを映し出す役割を、それぞれがになっていることが一層よくわかってくる。様々な実践的な課題を扱いながら著者の神学的パースペクティブの故に、それぞれがそれなりの関係をもって第Ⅱ部のそして本書全体の構成に寄与する。言うまでもなく、この種の論集では、文章の重複、くり返しを避けることはできないが、年代を背景に考え合わせて読むと著者が常に目指してきたものをうかがうことができて興味深い。

第Ⅲ部の講演は三篇あり、その一は教区教師会において語られたもので「日本における説教の諸問題」という題目の如く説教学の領域における考察である。「わたしたちのことば」で「神の言」を語る、とはどういうことかと問いかける。人間が神の言を語るというようなことは本来不可能事ではあるが、問いつめると、み霊の働きによってそれは可能なのだ。――神の言が語られるときわれわれがそれに奉仕するのだ、と言う。また前述のように、一足のわらじであちこち行き来すると著者が言うのは決して負け惜しみからではなく、こういう働きによって教会の神学が健康なものになることを確信しているからであり、教会の神学の本当の担い手は、講壇に立つ説教者でなければならないと言っているのである。さらに「牧会していない人間には説教はできない」とも言い、自分がつかわされている教会でこそ、本当の意味での説教ができるのだと言い切っている。「この意味で他の教会でする説教というものは、ある重要な点において欠けたところの説教である」というところに大いに共鳴する。その二は、教会の修養会における講演で「慰めの共同体」と題し、教会の性質を明らかにしようとする。ここではトールナイゼン、ボンヘッファーからの引用が多い。同じ教会論のテーマ「教会とは何か」の講演は「雪の下教会の伝統と課題」という副題をもっており、教会全体集会において記録されたものである。「聖書と教会」、「キリストと教会」を論じ、教会の本質に関しては、伝道を除いて教会は存在しない、と言明する。また革新派の人々の言う「教会の壁の外」での神の業に対して、著者は「教会の外に救いはない」というオーソドックスな立場を明らかにし、教会の礼拝に参加しないかぎり、神が生きて働きたもうと知ることができないと言う。「教会の外に救いはない」と「この人（イエス）による以外に救いはない」とを同じように看るところに著者の教会論を見る。

終りに、本書の読みどころはやはり第Ⅰ部の「実践神学のパースペクティブ」とその他の論文なのである。実践神学の視点、性質、位置などを解明しようとする著者は、「他の神学諸科がそれぞれ固有のパースペクティブにおいて認識する神学的な事柄、神学的所与を、実践神学は、この聖霊論的な場において、その実践的パースペクティブにおいて認識する。ここに実践神学のあるべき場所がある」（P8）という聖霊論的視点に立って論じ始める。ピルトナーによる実践神学の三パースペクティブ、また神学の論理中心領域に対する行為中心領域の考察、ボンヘッファー、ハーヴィー・コックスの解釈を紹介しながら、著者は自身による実践神学のパースペクティブを明らかにしている。

牧師・伝道者、神学者、一般のキリスト者に読んでもらいたい一書である。

（日本アッセンブリー教団・中央福音教会牧師）
（中央聖書学校教師）

西川重則著

『靖国法案の五年』
――撤回をめざす戦いの記録

一九七四年　すぐ書房

泥谷逸郎

実践者の言葉は重い。著者を知るものは皆この一句に同意してくださるにちがいない。著者はあとがきで、「私個人として、靖国法案反対運動に従事せざるを得なくなったのにはそれなりの必然性があったし、何と言ってもその要因は主の日の礼拝および牧師の説教にあったと思っているが、とにかくひとりの人間として考えてみると、とあることから、靖国神社法案そのものについて逐条的に学ぶ機会が与えられたことが大きな直接のきっかけになったと思われる」と言っている。福音主義神学会に所属するわれわれは、彼の今日の活動の源泉が主の日の礼拝と説教にあることを特に注目しなければならない。すなわち、信仰と生活は著者の中で一体化しているのである。福音主義神学会は教会に奉仕することを目的として設立されているのであるから、今後も続々とあらゆる面で活躍するこのような働き手が各地の福音的な教会から生み出されてくることを期待したい。

さて、四〇八頁にわたる本書の内容は二部からなっている。第一部は一九七一年四月十八日から一九七三年十二月十六日までのクリスチャン新聞に連載された一回八〇〇字の西川レポートを集めたものである。このレポートは靖国法案の動きを国会を中心とした政治の動きと推進派反対派の動きとを密接に関連づけながらレポートしているところに特徴がある。そして、これは二年八ヶ月の法案の動きと時の流れとを考えあわせながら読ませてくれる貴重な資料となっている。そしてそこに描き出されていることは、憲法にのっとった合理的な反対にもかかわらず、推進派の不合理で執ような突き上げに乗って、法案に共鳴する自民党がこれを少しずつ押し進めている歴史である。憲法を無視することによって、ただ力によって一国の運命を決定していこうとする一部の勢力の恐ろしさと、また憲法感覚に鈍感な保守党政治家が政治的にそれを利用し、死者を神々として復活させようとすることに同調している様子をわれわれは詳らかに知らされる。

第二部は解説である。いろいろな雑誌、パンフレットなどにのせた論文を集めたものである。また、本書はこの第二部によってより一層輝きを増している。レポートで言い足りなかったところが、十分に、また深く堀り下げられて論じられているといってよい。

この解説を読んでわれわれ読者が考えさせられることは多い。「日本の神道的民族国家の精神風土」の根強さ、そしてこ

れと戦いをなす者は徹底的な戦いを決意しなければならないことが先ず指摘される。さらに靖国法案は、われわれに政治と宗教の両面からチャレンジしているのであるから、福音主義に立つものはこの両面から応戦していかなければならないのである。ところで、福音主義に立つと自負するわれわれは、靖国法案問題を宗教に限って見ていこうとする傾向にあるのではないだろうか。その方向で戦おうとする決意は真剣であればある程よい。その方面で明らかにしなければならない問題は多いからである。この人々に著者が投げかけるチャレンジは、偶像崇拝とは何か、神社は宗教でないとは何か、日本人の宗教観にどれほどの突っ込み方をしているかなどの問いである。彼らはこれに答えていく責任と義務がある。

政治に重点を置いて靖国法案を考える人々には、日本人の法理解のもろさは何に由来し、これを克服せずして靖国法案を廃案にする道はないのではないかという問い、さらにかつての太平洋戦争をどのように評価するか、平和について福音主義者はどう考えているのか、などの質問があびせかけられる。彼らはこれらの大問題に答えを求めていく責任と義務がある。

福音主義神学会は靖国法案とトータルに取り組んでいける人人によって構成されているわけだから、宗教の側面にウェイトを置くものと政治の側面にウェイトを置くものとが協力して取り組んでいかなければならない課題を負わされている。日本の政治を動かし、日本の将来に大きく影響している宗教思想は不死鳥のような「神道的思想」である。この思想が根底にあって、「慰霊と顕彰」が言われているのである。しかもこのスローガンが単に神道関係者に限られた宗教的なもので終らず、政治と密接に関係しているところに、日本独特の国家の命運を決定する深刻な問題が隠されているといえよう。

本書が伝えるもう一つの問題は、靖国法案がさらに推進されていくとき、キリスト教界内に激しい対立を生み出してくるだろうということである。いくつかの教派の中で、キリスト者の立場から法案に賛成する主張が出始めている。これに対して本書は、彼らを説得しうるだけの神学樹立をわれわれに迫ってやまないのである。

（日本基督改革派南浦和教会牧師）
（日本基督神学校講師）

〔学会ニュース〕

米国における神学校の現状

レオナルド・ピーターソン

この原稿を依頼されたことを光栄に思っていますが、この一年間は米国の神学校について特別に研究はしていなかったので、与えられた責任を充分果せないと恐れています。しかし、米国を講演旅行中に、何人かの神学教授や神学生、また多くの牧師や信徒の方々と話し合う機会を与えられましたので、少し書きたいと思います。

第一の傾向は、多くの青年たちが、宣教師になることを希望している事実です。しかし、これらの人々は神学校へ行って、按手礼を受け、牧師の資格を持って外国へ行くことを望んでいません。彼らは今すぐ行きたいわけです。彼らが熱心なクリスチャンであることはもちろんですが、正式の訓練を受けるとか、専門家として按手を受けるということには反撥を感じています。

第二の傾向は神学生の増加です。これは第一の傾向と矛盾するようですが、とにかく、多くの教会で霊的なリバイバルが起り、その結果、神学生も増えているわけです。一つの神学校では、一九七一年に五七名、一九七二年に七七名、一九七三年に九七名の学生数を有しているのです。

第三には、これら神学生の興味が「神学」や「聖書」よりも「霊的生活」にあることです。私たちの教派神学校でも、そうした傾向があります。ひとりのドイツ人宣教師が、その神学校で学んでいますが、その人の話によると、神学校のチャペルはギターや歌ばかりで大変だ、とのことです。その学校の教務主任によると、こうした傾向は最近のものだそうです。しかし一般的に神学校の教授たちも、この霊的傾向に感謝すると共に、同時に、信仰の知的把握の点で学生たちを指導するように努力しています。数年前には、神学生たちが、卒業しても牧師になる気持がなく、彼らの関心は主として、知的な、そして社会的な分野であったことを考えると、霊的関心の傾向は最近のものといえます。そうして、数年前には神学生の数が大巾にダウンしていたわけですが、現在の状態も、知的・社会的関心を軽視するとすれば、近い将来に再び、下降線をたどるようになるかも知れません。

第四に、多くの神学生たちが、カウンセリングや、キリスト教教育の専門教育を受けていることです。カウンセリングの専門家には、将来、病院・精神病院・軍隊等のチャプレンとしての道が備えられており、キリスト教教育の専門家には教会での「教育主事」としての仕事が待っています。私個人は、こうした「教会教育」の成果を幾つかの教会で見て、大きな感銘を受

けました。こうした教育は子供だけでなく、成人も含まれますが、「聖書」、「神学」、「倫理」、「伝道」、「教会成長」、「カウンセリング」等々の高度な教育がなされているのです。私たちの教派でも今年初めて、こうした人々に「牧師免状」（一年間毎に更新必要）を与えました。こうした人々はキリスト教教育にたずさわっているわけですが、この牧師免許を与えることによって、「教育」の重要性を公認したわけです。

第五は、神学校間の協力です。お互いに協力して牧師を種々の専門家に教育するのです。これらは次のように行なわれます。

1、学生たちは病院につかわされて、カウンセリングをチャプレンより学ぶと共に実習をする。

2、私たちの教派神学校も参加している次の三つの方法をカタログから御紹介しましょう。

a　神学生都市伝道プログラム。夏季講習において六つの神学校が協力している。この資金は「リリー・エンドウメント協会」が醸出している。

b　マコーミック神学校との協力で、ノースパーク神学校で四五単位（コーター制）を取り、マコーミックで三六単位を取って、キリスト教教育の修士（マスター・オブ・アーツ）が取れる。

c　さらに、ヴァージニヤ州のプレスビテリアン・キリスト教教育大学とノースパーク神学校との協力による「キリスト教教育学修士」プログラムもある。

3、フラー神学校には「教会成長学」があり、ホイートン大学修士課程には「キリスト教コミュニケーション学」講座がある。他の神学生たちも、こうした専門教育を受けることができるわけである。

4、私はこの一年間に二つの超教派の教育プログラムに参加することができた。一つは、カリフォルニヤ州のガーデン・グローヴ・コミュニティ・チャーチ主催の「ミュラー・インスチチュート・フォー・サクセスフル・チャーチ・リーダーシップ」、他は「ベテル聖書コース」（日本にもある）である。前者には神学生も参加していたが、後者には参加が認められていなかった。

最後に、他の三つの傾向を記して終りたいと思います。

1、神学校内部に、もう一つの「真のクリスチャン共同体」を持ち、学生の霊的成長に寄与する。

2、神学校の計画、運営、教室でのディスカッションに神学生が従来よりも多く参加している。

3、教授法にも新しい方式が取り入れられた。例えば「現代神学の諸問題」、「人間、世界、教会」といった広い範囲のコースに数名の教授がチームを組んで教えるというものである。

一般的にいって、日本でも多くの新しいプログラムが神学校において取り上げられるだろうと思いますが、日本独特の必要に応じてなされるべきでしょう。聖書の基礎的勉強が最も大切であることは、論を待たないのですが、日本の現状に適応させて、メッセージを伝えるために神よりの洞察力が必要と思います。

（聖契神学校校長）

第三回アジヤ神学会議

山口　昇

第三回アジヤ神学会議（3rd TAP-Asia Theological Consultation）が、昨年十二月二十七日から、本年一月四日まで、香港において開催された。この会議には、アジヤ諸国、オーストラリヤ、英国等、十六ヵ国から、福音主義に立つ八十二名の神学者および神学教育に従事する者が、正式代表者として参加した。この会議を主催したのは TAP-Asia（Theological Assistance Program-Asia）であり、この団体は一九六八年のシンガポールで開催された Asia Pacific Congress of Evangelism の結果、アジヤにおける神学教育の重要性を認め、それを促進するために生れたものである。

さて、会議は三つの部分から成っており、十二月二十七日から三十日は拡大神学教育に従事している人々の会議であり、拡大神学教育のための教科書やカセット・テープなどの資料も展示された。第二の部分は神学教育に関するものであり、十二月三十日から一月一日までの三日間にわたり、神学教育における学問的・霊的・実際的訓練の綜合、アジヤにおける自国人の教師の養成、神学教育における経済的自給、カリキュラムの評価、アジヤにおける神学校の認可の問題などが討議された。第三の部分はバンコックにおけるWCCの「今日の救い」の討議と対応して、福音主義陣営のアジヤにおける態度の表明を目指して、「聖書的救い」についての討議が一月一日から四日までなされた。ここでは、聖書の権威と伝道、創造の聖書的理解、福音の性格、キリストの特異性と現代世界における彼のわざ、旧約聖書における救いの概念、今日における神学の人間化をめぐる論議、伝道の神学における人間化、信仰に対する現代的アプローチ、救いにおける聖霊、アジヤの文化と直面している伝道の命令、人類の進歩と発展における教会の使命などについての論文が読まれ、討議がなされた。そして、最後には、これらの討議をふまえて香港宣言を発表するはずであったが、その草案を承認したところで時間切れとなり、細かい表現の訂正などは、起草委員会に付託して散会となった。（その後起草委員会で検討の結果、七月に正式の宣言文ができあがった。）

この会議はアジヤ人が主体となって行われたものであり、会議中にも、しばしばアジヤということを強調する発言が行われた。このことは、たとえば、香港宣言の中でも明白に述べられている。「われわれは、アジヤの各地において西欧の宣教師たちが自己を捨てて働いて来たことに対し、感謝の意を表明す

る。この働きを継承していくのはわれわれの責任である。しかし、われわれがアジヤ人に福音を提示するとき、アジヤとの関連を持った方法で行わなければならない。われわれが提示しなければならないのは真実の福音であるが、われわれはそれをアジヤの衣をまとわせて提示しなければならない」（香港宣言の第四項）。そのようなことから、アジヤ人の神学教育スタッフの養成とアジヤ人による神学の形成が真剣に討議された。

「今日の救い」との関連においては、バンコック会議に至るまでの経過と、その背景が報告され、さらに、バンコック会議で打ち出されたWCC側の見解は、福音の人間化であるということが強調された。この点については、特に韓国のチュル・ハ・ハンの論文と、インドのブルース・ニコルズの論文に興味があった。そして、社会実践と同時に伝道の必要が強調された。香港宣言には次のように述べられている。

「しばしば、福音はあまりにも狭い『霊的』な形で提示されてきた。信仰義認が福音の中心であることを強調するのは正しい。しかし、これは人間社会の必要に対して適切な関心をいだくことを除外するものではない。われわれは、両面を強調したい。神は人間の全領域に関心を持っておられる。人間生活の中で神の支配の対象とならない部分はなく、神との関係なしに生きられる分野もない。

したがって、キリスト者はアジヤの大部分を悩ませている悲惨な状況に深い関心をいだかなければならない。キリスト者は不正と非人道的なことに抗議し、人間社会の状況を改善する運動を支持しなければならない。これは明白なキリスト者の義務であり、決して無視されてはならないものである。この点とのかかわりにおいて現代工業技術の成果は、アジヤの大衆のために利用されなければならない。

しかし、福音は人間の物質的条件を改善することに終始するという考えを、われわれは拒絶する。人はイエス・キリストに対し、主として、また救い主としての信頼を置かない限り、神の福音は、聖書的な正しい意味において、その人に到達したと言えない。われわれは、人々を福音の挑戦に直面するところまで導き、彼らの生活が神の力によって変えられ、彼らが神の教会の中において成長させられて行くようにしなければならない。われわれは伝道の優位性を認めることによって、神の超越性を強調するのである……」（九―一一項）。

最後に、今回の会議によって、従来の TAP-Asia は、Asia Theological Association と改称されることになった。

亜細亜聯合神学大学院

前述の Asia Theological Association では「アジヤ人をアジヤで訓練する」ということを、大きな目標の一つとしてきたが、その具体化の第一歩として、今年五月一日に韓国のソウルにおいて亜細亜聯合神学大学院（Asia Center for Theological Studies and Mission）が発足した。これはBDレベルの神学校

を卒業した者がさらに神学研究をするために設けられたもので、韓国における超教派的代表者によって理事会が構成され、教授陣も韓国の代表的神学者および宣教師からなっている。授業は九月―十一月、一月―三月、四月―六月の三学期制で、英語で講義がなされる。授業はセミナー形式でなされ、聖書学、組織神学などがなされるが、特にアジヤの特色を生かして、アジヤ研究に重点が置かれているようである。たとえば、最近の連絡によると、秋の学期には、「アジヤと対決する福音」とか、「福音によって対決を迫られているアジヤ」、「アジヤ教会史」、アジヤに重点を置いた、キリスト教の発展の歴史的・方法論的研究をするという「宣教学」などが開講されるという。また特別講師として、フラー神学校のマックギャヴラン博士や、香港のフィリップ・テン博士などが招かれる予定である。ここでの研究を通して、修士および博士号が授与されるとのことである。詳細についての連絡先は左記の通り。

The Director, ACTS
183 Choong Chongno 3-ka
Seodaemoon-ku, Seoul, Korea

なおこのような神学大学院が、来年には、香港にも設立される予定であり、現在その準備が着々と進められているということである。

（共立女子聖書学院長）

東部部会報告

富井　悠夫

一、第五回総会

四月一五日（月）午前十一時より日本基督改革派東京恩寵教会にて開催。

○シンポジウム「今日における救い」発題山口昇師・泉田昭師。

○講演会「抵抗権―宗教改革史上の一考察」丸山忠孝師。

○規約改正　神学会規約六条に次の一項目を加える。

一、資格の喪失　三年間義務を怠った場合は、会員の資格を喪失するものとする。

○新理事　宇田進、山口昇、小林和夫、西満、下村茂、富井悠夫、横山武、今野孝蔵、佐布正義、榊原康夫、村瀬俊夫、泉田昭、小島彬夫、ハーバード・H・スコーグランド、泥谷逸郎、吉岡繁、鍋谷堯爾、村上久、橋本竜三、安田吉三郎、クレメント・ワルバート、フレッド・モーア、山中良知、春名純人、松田一男、服部嘉明、中島守、工藤弘雄。

二、理事会報告

○組織

（理事長）宇田進、（書記）西満、横山武、下村茂、富井悠夫、（会計）今野孝蔵、佐布正義。

○秋の研究発表会、講演会

一一月一八日（月）中央聖書学校にて開催、プログラムは従来の形式をとる。

○第六回総会　一九七五年四月一四日(月)の予定。

三、新会員（一九七三年四月以降）

○名誉会員・山本岩次郎

○準会員・熊谷光広、楠本修平、佐武礼子、岡田賢治。

○正会員・安井忠男、湊晶子、安田正人、有木義岳、唄野隆、清水氾、岸田馨、後藤牧人、玉井俊一郎、津村俊夫、丸山忠孝。

○賛助会員・日本キリスト長老久我山教会。

（基督改革派キリスト告白教会牧師）

西部部会報告

中島　守

昨年五月二十一日、日基教団大阪扇町教会において、従来の通称「関西部会」が、「西部部会」という名称のもとに発足してから約一年半が過ぎようとしている。その間、当部会では、その特殊性を活かしつつ、以下のような活動がなされて来た。

一九七三・一一・二三（金）出席者三五名

日本基督改革派神港教会にて

研究発表

『主の晩餐・その制定語と初代教会におけるその歴史と考察』　村上　久

『キリスト教教育カリキュラム作製における一例・全ルーテル教育会議の活動と展望』　谷口　泰造

『聖書的規範倫理について』　高力弘一郎

公開講演

『王とその民・権威なき権威の美』　服部　嘉明

一九七四・五・一三（月）出席者二五名

日本イエス・キリスト教団垂水教会にて研究発表

『ダルマとロゴスの周辺・その比較思想論的展開』　久保田　周

『農村伝道と都市伝道の諸問題』　開出　寛

公開講演

『聖書的基盤に立った情況の倫理の評価』　松田　一男

なお、このほか昨年より現在までに五回の理事会が開かれ、以下のような事柄を中心に種々協議が重ねられてきている。

一、一昨年より懸案であった西部部会会員の確認は、十一月西部在住者の名簿を作成し、一応正会員五六名（其後四名入会）、準会員七名を確認したが、なお東部部会と協議調整の必要がある。

二、現在の規約のうち、活動の現状にそわない部分の改正を必要とすると思われるので、早い時機に総会に於ける規約改正を提案する。

三、去る四月の東京における総会において確認されたように、西部部会の活動の為には賛助会費及び特別献金をあてるので、今後更に賛助会員を増やし、特に信徒の中に学会の必要性を啓蒙し、学会を支える信徒をどれだけ啓発できるかが、今後の学会の一つの鍵と思われる。

四、今年、秋の活動は

一一月一九日（火）夕
丸山忠孝博士による公開講演会
『教会に告げなさい』Dic Eclesiae）mt. 18:17
――宗教改革教会論史上の一考察――
『テオドール・ベザの教会論』
『モレリー事件―長老政治と会衆政治との問題』（後者二論文は関西の諸神学校において公開講演）

西部部会の一つの特徴は、関西にあるいくつかの神学校が賛助会員となり、活動の面でも、経費の面でも、また人材の面でも積極的な協力をしていることである。現在、西部部会の賛助会員は、大阪聖書神学校、神戸ルーテル聖書学院、神戸ルーテル神学校、神戸改革派神学校、大阪キリスト教短大神学科、神学院、日本キリストバプテスト連合宣教団、日本自由メソジスト阪南教会の七会員である。すでにふれた通り、これが今後個人の会員へと発展していくことを願うものである。

西部部会の活動、今後の課題について一言すると、すでに今迄も問題になってきたことであるが、これが学会である以上、学的水準を保つために、ある程度閉鎖的性格を持つことはやむをえないという面と、同時に、神学が教会に奉仕する学である以上、研究の場も広く教会に開かれている必要があるという面とをいかに調和させていくかということが、将来の学会活動の一つの課題である。

多忙な現代なのである。加えて、メリット、デメリットを敏感に計算する関西の土地柄の中で、学会がいかにしてその高い気風を堅持しつつ、地についた歩みをしていくかが、我々に与えられた大きなチャレンジである。

（大阪基督教学院教会牧師）
（大阪基督教短期大学チャプレン・助教授）

編集後記

ここに第五号を、みなさまのお手もとにおとどけすることができ、感謝いたしております。石油危機以来の急激なインフレのために、本誌もページ数の削除を余儀なくされてしまいました。なにとぞ、悪しからずご了承下さい。

しかし、内容的には充実を目指して久保田周氏、および丸山忠孝氏の興味と示唆に富む論文二編を収めることができ、ご多忙中に執筆してくださいました先生方に感謝いたしております。宇田進氏の原稿は今夏スイスのローザンヌにおいて開催された講演をまとめていただきました。出席できなかった方々のために役立つのではないかと思い収録させていただきました。

今号から編集委員に関東の者だけでなく、関西の西部部会から春名純人氏に加わっていただきました。西部部会の会員の方方のご要望にそうことができますよう、今後とも努力いたしたいと思っております。

物価の上昇がはげしい経済状勢の現状に対処するため、不本意ながら、誌代の値上げをさせていただきました。読者の皆様にもご迷惑とはぞんじますが、おゆるしください。この上は、内容の質的向上に努力いたしたいと思いますが、その点に関し、皆様のご意見をお寄せくださいますよう、お願いいたします。

（山　口）

昭和四十九年十一月十五日発行　頒布価　八〇〇円

編集者　山口　昇
　　春名純人
　　小林和夫

発行者　東京都東久留米市氷川台一ノ八ノ一五　日本基督神学校内
　　日本福音主義神学会

印刷　いのちのことば社印刷部

発売　いのちのことば社